

仙台市文化財調査報告書第56集

仙台市 高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ

昭和58年3月

仙台市教育委員会
仙 台 市 交 通 局

仙台市 高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ

昭和 58 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会
仙 台 市 交 通 局

序 文

仙台市高連鉄道建設に係る埋蔵文化財の本格的な発掘調査は、昭和56年から開始され、今年で3年目を迎えるに至っています。これまで「下ノ内遺跡」の縄文時代中期の集落跡の発見、泉崎・中谷地・鳥居原地区の調査では、プラントオパール分析法にもとづく水田跡の発見など貴重な成果を得ております。

本報告は、今年度（昭和57年）調査した成果について、そのあらましを速報として公表するものであります。

こうした貴重な文化財の保存・継承は、現代に生きるわたくしたちに課せられた重要な責務と考えます。今後とも、みなさま方の御理解ある御協力と御助言を御願い申し上げます。

最後に、発掘調査や本報告書刊行に当り、多くの方々の御協力をいただきました。ここに心から感謝を申し上げ序といたします。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は、仙台市高速鉄道南北線関係遺跡に係る下ノ内遺跡・泉崎前遺跡・泉崎浦遺跡・中谷地遺跡・鳥居原遺跡における昭和57年度の遺跡発掘調査概報である。
2. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 篠原信彦……Ⅰ・Ⅲ

吉岡恭平……Ⅳ・V

高橋勝也……VI

斎野裕彦……II・図1～3

荒井 格……VII 4

造構トレス　吉岡、斎野、高橋、鈴木 実、藤沢 敏、古屋敷則雄、織内 登、松木 仁、佐藤 博、古川陸子

土器実測　篠原、渡辺忠彦、藤沢、古屋敷、毛利貴洋、後藤 修、大友 透

土器トレス　藤沢、古川

石器実測　荒井、鄧 晴、藤田 淳

石器トレス　藤田

造構写真撮影　篠原、吉岡、高橋、斎野、荒井、渡辺、鈴木、田中則和、主浜光朗

遺物写真撮影　鈴木、渡辺、毛利

遺物拓影　古川、山寺慎子、千葉きよ子、吉田雅之

遺物接合・補修　渡辺、毛利、後藤、織内、吉田、古川、山寺、千葉、松本幸子、斎藤 美弥子

編集は篠原・吉岡・斎野・荒井・高橋が行った。

3. 本書中の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原:1970)を使用した。
4. 本書中の泉崎前・中谷地・鳥居原遺跡は新発見の遺跡であり、この調査成果に基き、分布地図を改訂中であるが、今回は従前のまま使用した。
5. 調査にあたっては次の方々の御教示と御助言を賜った。(五十音順、敬称略)
書上元博(東北大學)、加藤強(仙台中央食肉卸売市場KK)、佐々木章(大分短期大學)、庄司駒男(東北大學)、庄子貞雄(東北大學)、須藤隆(東北大學)、畠中健一(北九州大學)、藤下典之(大阪府立大學)、藤原宏志(宮崎大學)、星川清視(東北大學)、松谷曉子(城西衛科大學)、松本秀明(東北大學)、三好教夫(岡山理科大學)、森本岩太郎(聖マリアンナ医科大学)、安田啓憲(広島大學)、山田格(東北大學)、山田一郎(東北大學)

本文目次

序 文

例 言

I. 調査経過.....	1
II. 遺跡の立地と環境.....	4
III. 下ノ内遺跡.....	5
1. 調査の方法	2. 調査の概要
3. まとめ	
IV. 泉崎前遺跡.....	33
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	4. まとめ
V. 泉崎浦遺跡.....	34
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	4. まとめ
VI. 中谷地遺跡.....	46
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	
VII. 鳥居原遺跡.....	50
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 層位	4. 調査の概要

挿図・表目次

第1図 調査区位置図.....	2	第9図 出土遺物(4) (7号住居跡)	15
第2図 遺跡の位置と周辺遺跡.....	3	第10図 8号住居跡.....	18
下ノ内遺跡		第11図 出土遺物(5).....	19
第3図 グリッド配置図.....	5	泉崎前・泉崎浦遺跡	
第4図 造構配置図.....	7・8	第12図 泉崎前遺跡全体図・断面図	
第5図 7号住居跡.....	9・10	杭列平面図、泉崎浦遺跡全体	
第6図 出土遺物(1).....	12	図・断面図.....	35・36
第7図 出土遺物(2).....	13	第13図 泉崎浦遺跡墓塚群平面図	
第8図 出土遺物(3).....	14	1号住居跡平面図・出土遺物.....	38

中谷地遺跡		第17図 本調査区平面図.....	51・52
第14図 基本層位.....	46	第18図 大畦断面図.....	51・52
第15図 造構平面図.....	47・48	第1表 本調査一覧表.....	1
鳥居原遺跡		第2表 試掘調査一覧表.....	1
第16図 試掘調査区平面図.....	51・52		

写真図版目次

下ノ内遺跡		写真24 水田跡II検出状況.....	40
写真1 桐文時代の造構全景.....	23	写真25 東壁土層断面.....	41
写真2 7号住居跡(1号炉)全景.....	23	写真26 11層検出畦畔状造構.....	41
写真3 7号住居跡(2号炉)全景.....	23	写真27 杖列.....	41
写真4 7号住居跡2号炉.....	24	泉崎浦遺跡	
写真5 5号住居跡全景.....	24	写真28 墓壙群.....	42
写真6 5号住居跡出土遺物.....	24	写真29 7号墓壙人骨検出状況.....	42
写真7 1号埋設土器遺構.....	25	写真30 4号墓壙副葬品検出状況.....	42
写真8 2号埋設土器遺構.....	25	写真31 1号住居跡全景.....	43
写真9 古墳～平安時代の造構全景.....	25	写真32 水田跡I畦畔検出状況.....	43
写真10 8号住居跡全景.....	26	写真33 水田跡I足跡検出状況.....	43
写真11 9号住居跡全景.....	26	写真34 水田跡I牛足跡検出状況.....	44
写真12 9号住居跡カマド全景.....	26	写真35 水田跡I人足跡検出状況.....	44
写真13 10号住居跡全景.....	27	写真36 水田跡II畦畔断面.....	44
写真14 6号竪穴遺構全景.....	27	写真37 泉崎前・泉崎浦遺跡出土遺物.....	45
写真15 51号土壤全景.....	27	中谷地遺跡	
写真16 2号掘立柱建物跡全景.....	28	写真38 I区中世と思われる水田跡全景.....	49
写真17 3号・4号掘立柱建物跡全景.....	28	写真39 I区平安時代の水田跡全景.....	49
写真18 5号掘立柱建物跡全景.....	28	写真40 II区平安時代の水田跡全景.....	49
写真19 出土遺物(1).....	29	鳥居原遺跡	
写真20 出土遺物(2).....	30	写真41 畦検出状況.....	51・52
写真21 出土遺物(3).....	31	写真42 本調査区全景.....	51・52
写真22 出土遺物(4).....	32	写真43 畦検出状況.....	51・52
泉崎前遺跡		写真44 土層断面(試掘トレンチNo.6).....	51・52
写真23 水田跡I検出状況.....	40		

I. 調査経過

仙台市高速鉄道南北線建設に伴う発掘調査は、昭和56年度に開始され、本年度は2年目を迎えた。調査の対象地区は仙台市南部の長町・富沢・大野田地区に限定された。この地区は、遺跡が多く分布し、最近の調査によって重層構造の遺跡が多い場所として知られている。

昭和57年度の調査計画は、本調査が昨年度から継続の下ノ内遺跡、試掘調査が鍋田工区から泉崎東工区に至る約1kmの範囲である。

下ノ内遺跡は、迂回道路「下ノ内・六反田線」及び高速鉄道本線敷の一部を調査し、縄文から平安時代の整穴住居跡等の各遺構が発見された。

試掘調査は、泉崎東・中谷地・鍋田工区の順に開始した。昭和57年4月、泉崎東工区の西隣りに位置する山口遺跡（仙台市民体育館建設に伴う発掘調査）で、土壤分析を実施し、イネのプラントオバールが多量に発見され、古い時代の水田が営まれた可能性が極めて強いという分析結果が示された。その後、山口遺跡において中世・平安時代の水田跡の発見が発端となり、名取川・広瀬川によって形成された後背湿地も水田跡が発見されることを十分予想された。試掘調査地区でも山口遺跡同様の分析結果であり、水田の畦畔が各地区で検出され、新発見の遺跡として泉崎前・中谷地・鳥居原遺跡を登録して本調査へ移行した。一方、泉崎浦遺跡では、試掘調査で整穴住居跡・水田跡の畦畔が検出され、本調査へ移行した。

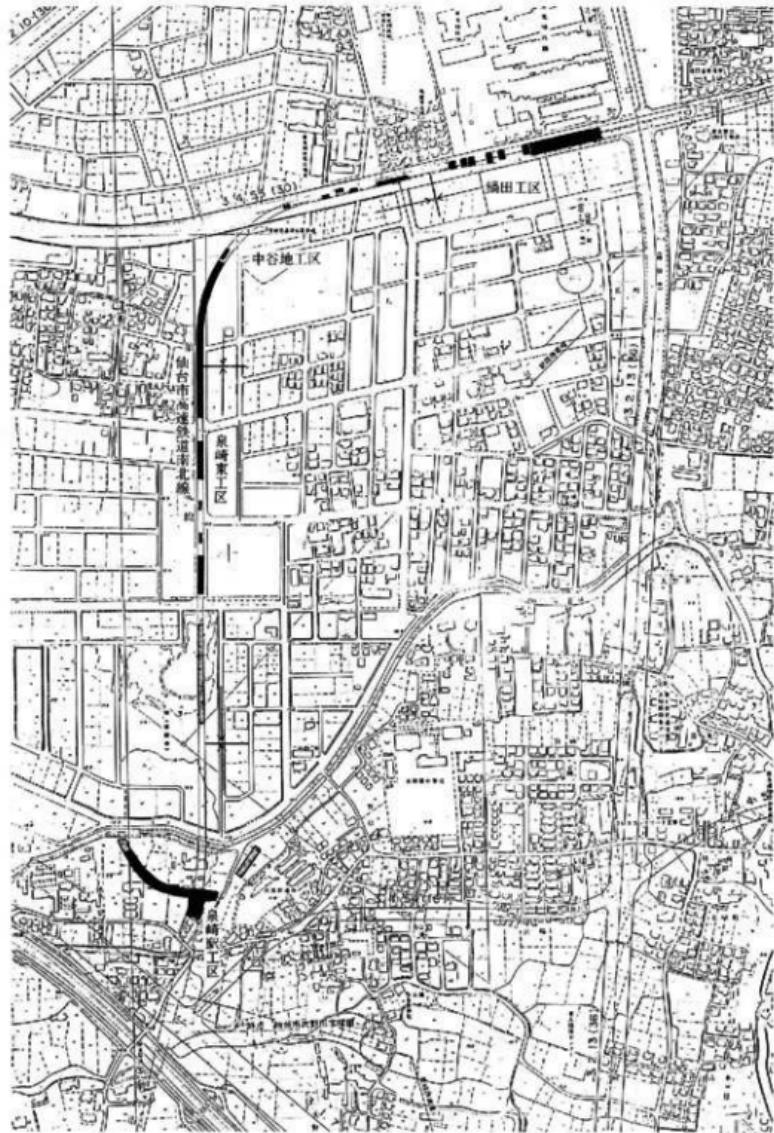
調査にあたっては、仙台市交通局高速鉄道建設部と度々にわたって協議を行ない、昭和58年2月16日、泉崎東工区の調査を最後に本年度分の調査を終了した。

第1表 本調査一覧表

遺跡名	時代	調査期間	調査面積	担当職員	備考
所在地	種類				
下ノ内遺跡	縄文～平安	S57.4.12～S57.12.25	2,200m ²	藤原信彦・渡辺忠彦 鈴木 実	泉崎駅工区
仙台市富沢四丁目	集落跡				
泉崎前遺跡	平安以前・平安・中世	S57.9.1～S57.12.11	600m ²	吉岡泰平	
仙台市泉崎一丁目	水田跡				
泉崎浦遺跡	縄文・古墳・平安・江戸	S57.9.13～S57.12.25	1,200m ²	吉岡泰平・田中利和	泉崎東工区
仙台市泉崎一丁目	集落跡・水田跡・墓	S58.1.5～S58.2.16			
中谷地遺跡	平安・中世	S57.8.25～S57.12.23	1,850m ²	高橋謙也・主浜光輔	中谷地工区
仙台市長町南三丁目	水田跡				
鳥居原遺跡	平安以前・平安	S57.10.5～S57.12.25	1,300m ²	瀬野裕志・荒井 格	鍋田工区
仙台市長町南三丁目1他	水田跡	S58.2.3～S58.2.12			

第2表 試掘調査一覧表

高速鉄道建設工区	調査期間	試掘面積	発見遺構	担当職員	備考
泉崎東工区	S57.4.12～S57.7.1	480m ²	整穴住居跡・水田跡	吉岡・瀬野・荒井・高橋	本調査へ移行
中谷地工区	S57.6.4～S57.12.11	710m ²	水田跡	吉岡・高橋・主浜	*
鍋田工区	S57.7.5～S57.10.4	350m ²	水田跡	東野・荒井	*
泉崎駅工区	S57.10.25～S57.11.26	280m ²		藤原・渡辺	
車鹿工区	S57.10.25～S57.11.4	72m ²			



第1図 調査区位置図



道跡番号	道跡名称	所属時期	道跡番号	道跡名称	所属時期
C-299	①下ノ内浦跡	绳文(中・後)、弥生、古墳～平安	C-106	三神峯道跡	旧石器、绳文(早・前・中)
	②扇崎前遺跡		C-107	芦ノ口道跡	平安
C-202	③泉崎池遺跡	绳文(後)、弥生、平安	C-112	大野川道跡	绳文(後)、奈良、平安
	④中谷地遺跡		C-152	新河原敷八道跡	奈良、平安
	⑤鳥居遺跡		C-153	堀ノ内道跡	
C-300	⑥下ノ内浦遺跡		C-155	原ノ東道跡	
C-007	砂押古墳	古墳	C-156	長町末道跡	
C-008	裏町古墳	古墳	C-195	富沢上ノ台道跡	奈良、平安
C-014	牧原古墳	古墳	C-196	伊古田道跡	奈良、平安
C-015	金洗訛古墳	古墳	C-197	六反田道跡	绳文(中・後)、弥生、古墳、奈良、平安
C-017	金四郎古墳	古墳	C-198	表東道跡	古墳、奈良、平安
C-031	手手内備穴群	奈良、平安	C-201	富沢宿水道跡	奈良、平安
C-038	玉の證古墳	古墳	C-203	砂押塚敷遺跡	平安
C-039	春日社古墳	古墳	C-233	山口道跡	绳文(中・後)、弥生、古墳、奈良、平安
C-040	五反田古墳	古墳	C-266	元勢目道跡	绳文(後)、奈良、平安
C-043	鳥居塚古墳	古墳	C-422	木手内室跡	平安
C-046	五反田細式古墳	古墳	C-520	高沢館跡	奈良、平安、中世
C-052	五反田木格塚	古墳	C-658	元袋古墳跡	

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡

II. 遺跡の立地と環境

仙台市高速鉄道南北線は、七北田を起点とし、七北田丘陵、仙台市街地をのせる段丘群を南下し、広瀬橋付近から宮城野海岸平野へ入り、終点泉崎に至る。今年度の調査は宮城野海岸平野の中の郡山低地において行なわれた。郡山低地は北東縁を広瀬川、南縁を名取川、北西縁を長町一利府線により画されている。ここには広瀬・名取両河川により形成された自然堤防、後背湿地が見られる。自然堤防は広瀬川右岸、名取川左岸に見られ、特に名取川左岸には旧荒川が曲流しており、名取川と共に自然堤防を良好に発達させている。また郡山低地の中央には南北に走る自然堤防が見られる。これら自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。

調査対象区域は、郡山低地の中でもその西半部である。ここには北半の鳥居原、中谷地、泉崎に広範な後背湿地が広がり、南半の下ノ内、大野田には自然堤防が見られる。調査は、以下の5遺跡で行なわれた。北半の後背湿地に立地する遺跡では、鳥居原遺跡（鍋田工区）、中谷地遺跡（中谷地工区）、泉崎前遺跡（泉崎東工区）がある。中谷地遺跡と泉崎前遺跡の間には泉崎浦遺跡（泉崎東工区）があり、泉崎の集落をのせる扇状地の東端の微高地に立地し、一部後背湿地を含む。南半では旧荒川右岸の自然堤防に立地する下ノ内遺跡（泉崎駅工区）がある。

この郡山低地西半部及びその周辺は、仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域である。昭和51～53年度に調査された六反田遺跡では、沖積平野においては県内で最も古い縄文時代中期中葉（大木8b式期）の竪穴住居跡や、後期初頭の竪穴住居跡、古墳・奈良・平安時代の竪穴住居跡等が検出されている。また昭和53・56・57年度に調査された山口遺跡では、縄文時代早期後半の遺物、中期・後期の土壙等、弥生時代の遺物、奈良・平安時代の竪穴住居跡、平安時代・中世の水田跡が検出されており、両遺跡とも重層構造の遺跡である。これらのことにより、両遺跡周辺においても同様の遺構・遺物が発見される可能性は高く、かつ重層構造であると考えられる。その他には縄文時代の遺跡として三神峯遺跡・大野田遺跡・天袋Ⅱ遺跡などがある。古墳時代の遺跡は数多く、西多賀周辺には裏町古墳・金洗沢古墳・今年度調査された砂押古墳等が、大野田には鳥居塚古墳・王の塚古墳・春日社古墳・昨年度調査された大野田1号・2号古墳等がある。また、鳥居原遺跡の北には金岡八幡古墳が、泉崎前遺跡の西方には教塚古墳がある。奈良・平安時代の遺跡では今年度調査された下ノ内浦遺跡等がある。中世では新荒川の南に富沢館跡がある。

尚、郡山低地西半部は古来自然堤防上に集落や畠が営まれ、後背湿地には水田が広がっていたが、近年土地区画整理が行なわれ、宅地化が急速に進み、その景観は変貌の一途をたどっている。

III. 下ノ内遺跡

1. 調査の方法

$3 \times 3\text{m}$ のグリッドを基本とし、I 区は、南北に A～R、東西に 1～39、II 区は I 区の東側に接続して東西に A～N、南北に 0～15 グリッドを設定し、調査を実施した(第3図)。

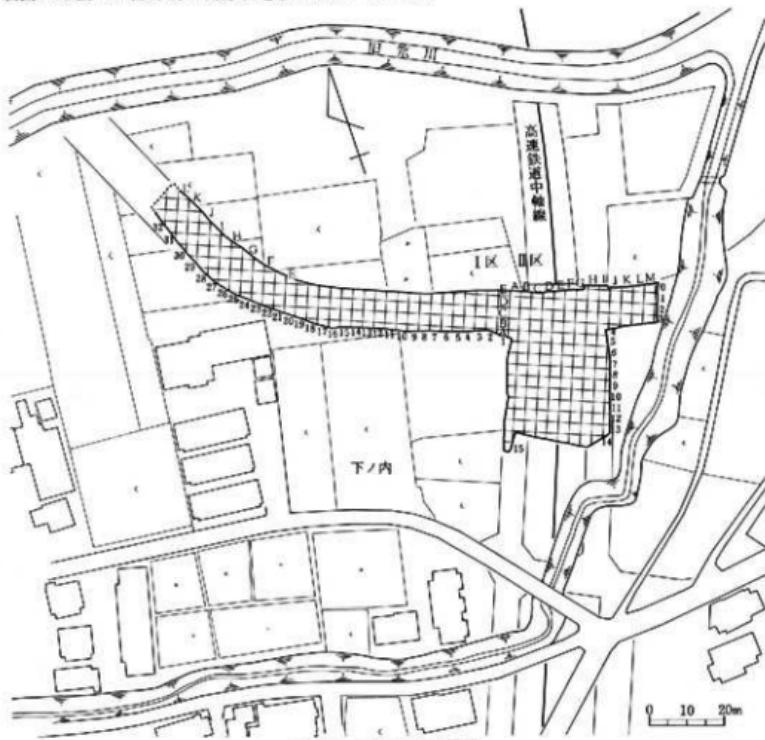
2. 調査の概要

A. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 発見遺構

竪穴住居跡

I 区 23～30 グリッドで 3 軒が検出され、東側より 6 号・5 号・7 号住居跡として調査を実施した。尚、6 号住居跡は昨年度の継続調査である。炉は 3 軒とも複式炉であり、6 号・7 号住居跡の床面には部分的に河原石を敷きならべている。



第3図 グリッド配置図

7号住居跡（第5図、写真2～4）

〔造構の確認〕 I区H・I-28～30グリッドの第Ⅱ層（褐色シルト層）及び第Ⅲ層（褐色砂層）で検出された。

〔重複・増改築〕 第Ⅱ層上面で確認された1号河川跡に西側の一部が削平されている。さらに住居跡堆積土5層上面に炉が構築されている。

床面上において炉が2基、ピット40が検出されている。炉は重複しており、ピットの中にも重複しているものがみられることより、改築しているものと考えられる。

〔平面形・規模〕 長軸6m、短軸（残存長）5.3mのほぼ円形で、長軸は南北方向である。

〔堆積土〕 6層に大別される。

1層（明黄褐色シルト層） 最上層である。住居跡の北側を除きほぼ全体に堆積している。

2層（にぶい黄褐色粘土質シルト層） 住居跡の壁際を除きほぼ全体に堆積している。

3層（褐色シルト層） 住居跡の北側から東側にかけて堆積しており、多量の炭化物を混入する。

4層（にぶい黄橙・黄褐色粘土質シルト層） 住居跡全体に堆積しており、中に少量の炭化物を混入する。

5層（黒褐色シルト層） 住居跡全体に堆積しており、住居跡中央部の床面を覆っている。多量の炭化物を混入し、縄文土器、石器が多数出土している。

6層（褐色砂質シルト層） ほぼ床面全体を覆っている層で、北側から西側にかけて壁際に厚く堆積している。炭化物を少量混入し、縄文土器、石器が多数出土している。

〔壁〕 第Ⅲ・Ⅳ層及び部分的に砂礫層を壁としている。壁は西壁が1号河川跡によって削平された以外は良好に残存しており、壁高は北壁で約45cm、東壁・南壁で約40cmで、床面より急角度で立ち上がる。

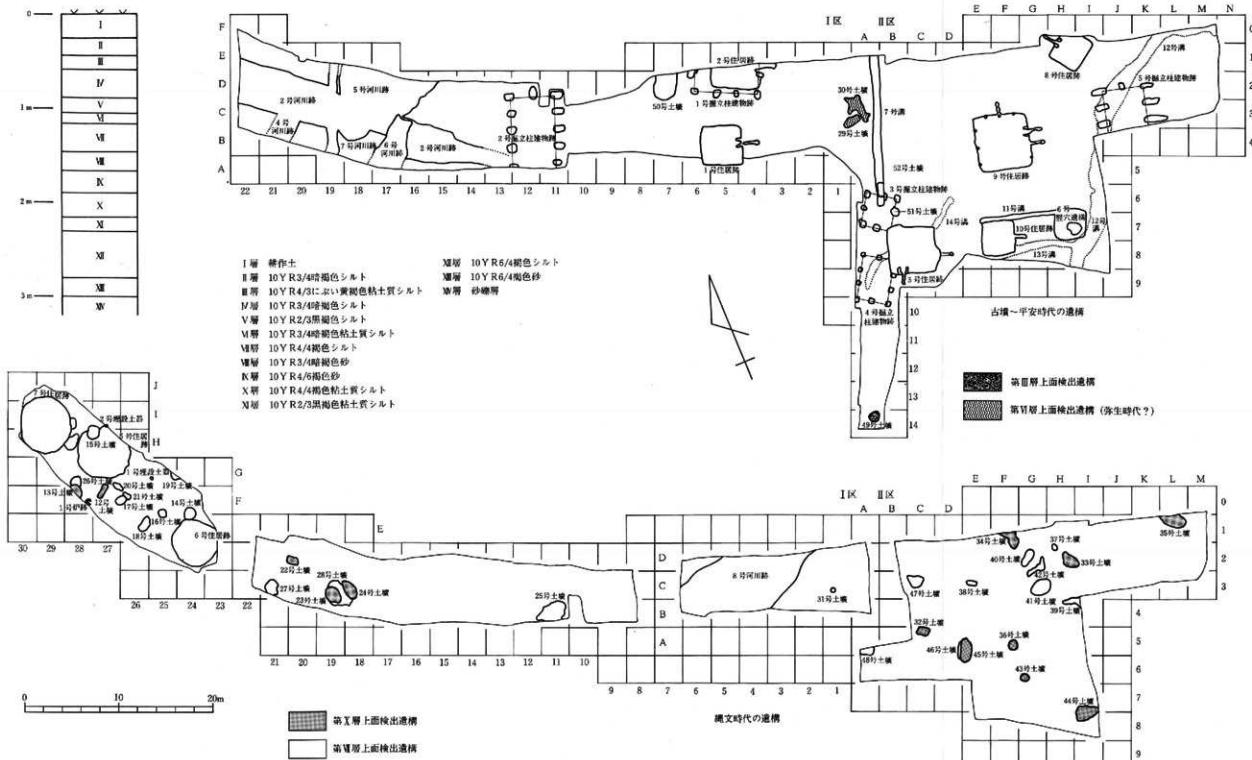
〔床面〕 敷石、黄褐色・白色の砂を床面としている。敷石は床面全体に敷かれているものではなく、炉の北側、住居跡中央部から北側の広範囲に見られる。径20cm前後の河原石の平坦な面を上にして敷きならべている場合が多い。さらに部分的に大きな石と石との隙間は5cm位の小石で埋められている。床面は炉の周辺がやや堅くなっている以外は柔らかである。

〔柱穴〕 40のピットが確認されているが、柱痕跡があるものはない。規模、堆積土よりP₁₃・P₁₄・P₁₅・P₁₆・P₁₇・P₁₈・P₁₉・P₂₀・P₂₁・P₂₂・P₂₃・P₂₄・P₂₅が柱穴と考えられる。さらに壁際のピットは壁柱穴かと考えられる。

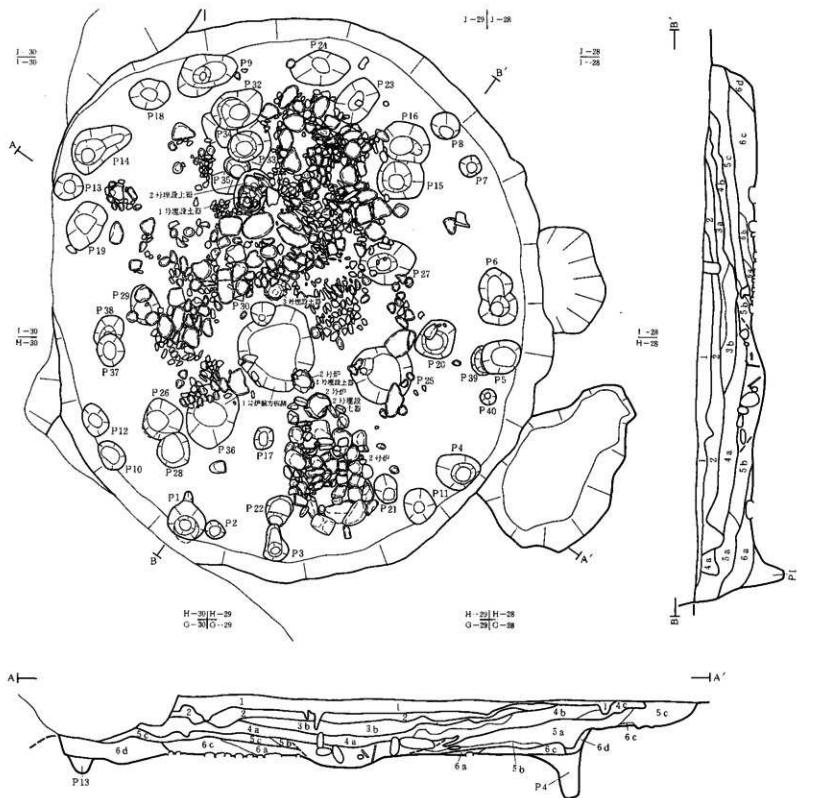
〔周溝〕 確認されなかった。

〔炉〕 3基がある。

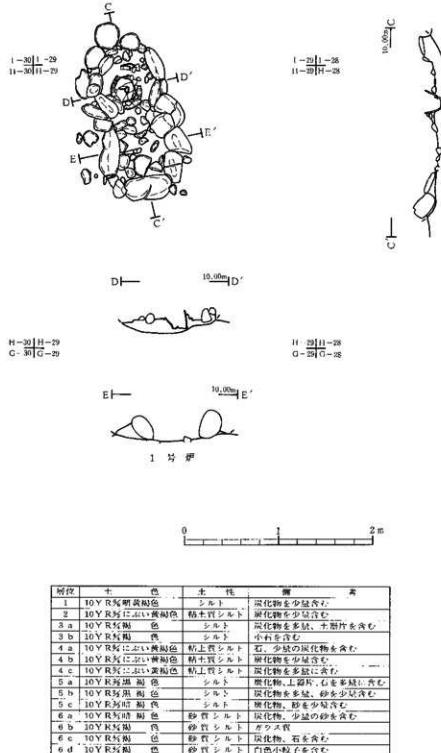
1号炉 堆積土5層上面で確認され、床面より約20cm浮いている。このことからこの炉は7



第4図 遺構配置図



第5図 7号住居跡実測図



号住居跡と直接関連するものではないと判断される。がの規模は長軸1.95m、短軸1.0mで、土器埋設石組部と敷石石組部から構成される複式炉で、主軸は南北方向である。堆積土は、多量の炭化物、焼土が混じる暗灰黄色・黒褐色シルトで、敷石石組部の奥壁、側壁の石はかなり火熱を受け、もろくなっている。なお、堆積土5層上面では、床面、ピット等が確認されておらず、別個の住居跡に付属するものか単独のものは判断しかねる。

2号炉 1号炉の直下に位置し、本住居跡に伴う炉である。炉の規模は長軸1.7m、短軸0.9mで、主軸は1号炉同様南北方向である。土器埋設部2組、敷石石組部から構成される複式炉である。構築方法は長軸1.8m、短軸1.0mの楕円形の掘り方に埋設土器を埋め、石組部を作っている。埋設土器、敷石石組部の堆積土は多量の炭化物、焼土が混じる暗褐色シルトが殆どで、埋設土器内外、敷石石組部の奥壁、側壁の石はかなりの火熱を受けてもろくなっている。埋設土器2個体は共に口縁部及び底部を欠損している。

3号炉 2号炉と重複し、2号炉の北隣りに位置する。上面には黄褐色砂で薄く覆われている。敷石石組部は、敷石部分が残存するだけで側・奥壁の石は取り除かれている。掘り方は長軸の残存長83cm、短軸80cmの楕円形である。堆積土は炭化物、焼土が混じる褐色シルトで、敷石石組の石はかなり火熱を受けてもろくなっている。

〔その他の施設〕 2号炉の主軸方向延長上に埋設土器3基がある。 P_{31} を切って1号埋設土器（第6図2）・2号埋設土器（写真19の4）が重複している。3分埋設土器は3号炉の北隣りの敷石下で検出されている。1号埋設土器は2号埋設土器の一部を壊し、土器片を底面に敷き、その上に底部欠損した深鉢を埋めている。堆積土には別個体の底部2個体が入っている。3号埋設土器の堆積土は多量の炭化物、焼土が混じる黒褐色シルトである。

さらに住居跡の東側には、長軸2.0m、短軸1.2mの楕円形の土壠状の張り出し部が確認されている。住居跡との重複関係は見られず、堆積土は住居跡堆積土5層と同一層である。底面は舟底形を呈し、住居跡床面より約20cm高く、住居跡の出入口の可能性がある。

〔遺物の出土状況〕 堆積土各層より縄文土器（第8図1～9）片、石器（第9図、写真21）が出土している。特に堆積土5層・6層から多く出土している。住居跡の年代を決定する資料は、2号炉及び床面上の埋設土器（第6図、写真19の1～4）、床面出土のものである。

埋設土器遺構

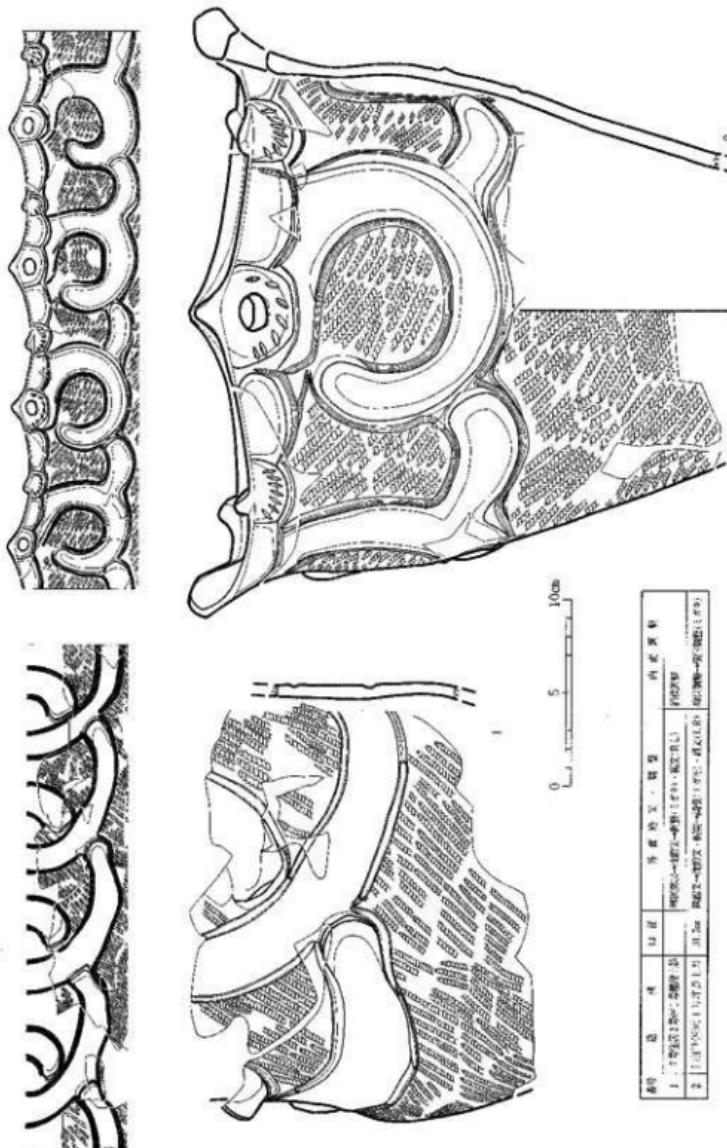
2基が検出され、確認面は1号が第Ⅹ層、2号が第Ⅺ層である。

1号埋設土器遺構（写真7）

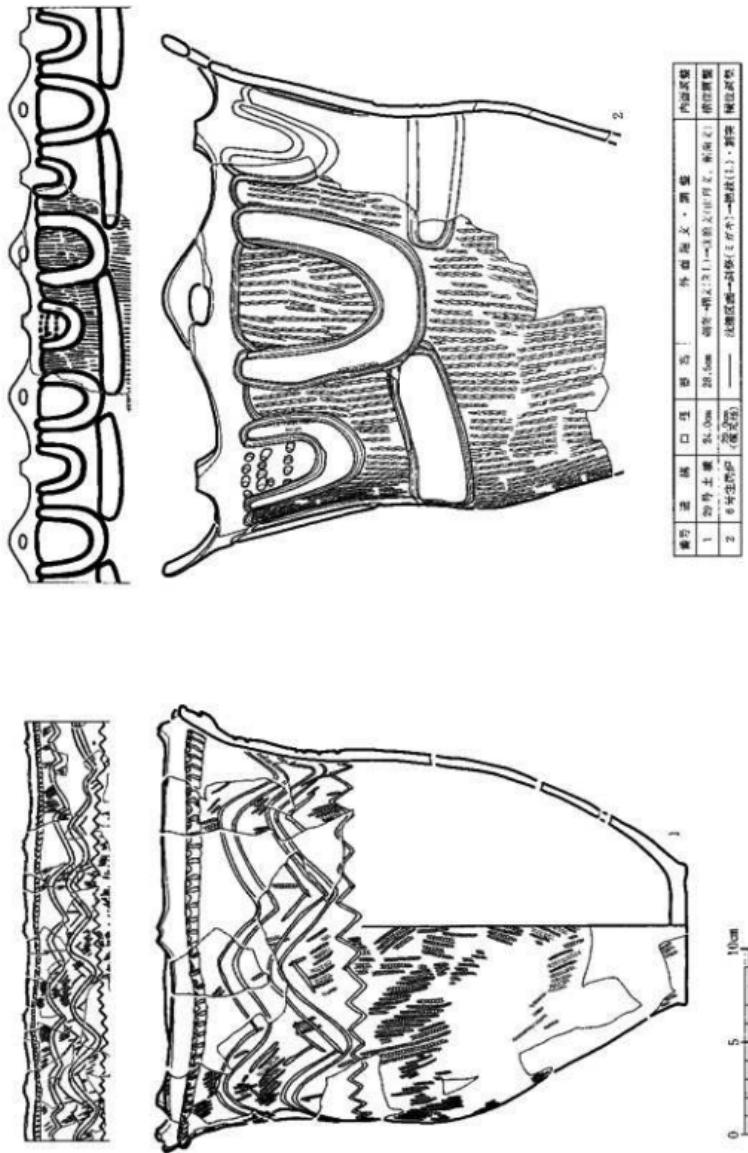
I区G-25グリッドで検出され、5号住居跡の東側に位置している。直径43cmのはば円形の掘り方に口縁部が欠損する縄文土器（写真20の1）を埋めている。掘り方の深さは48cmである。

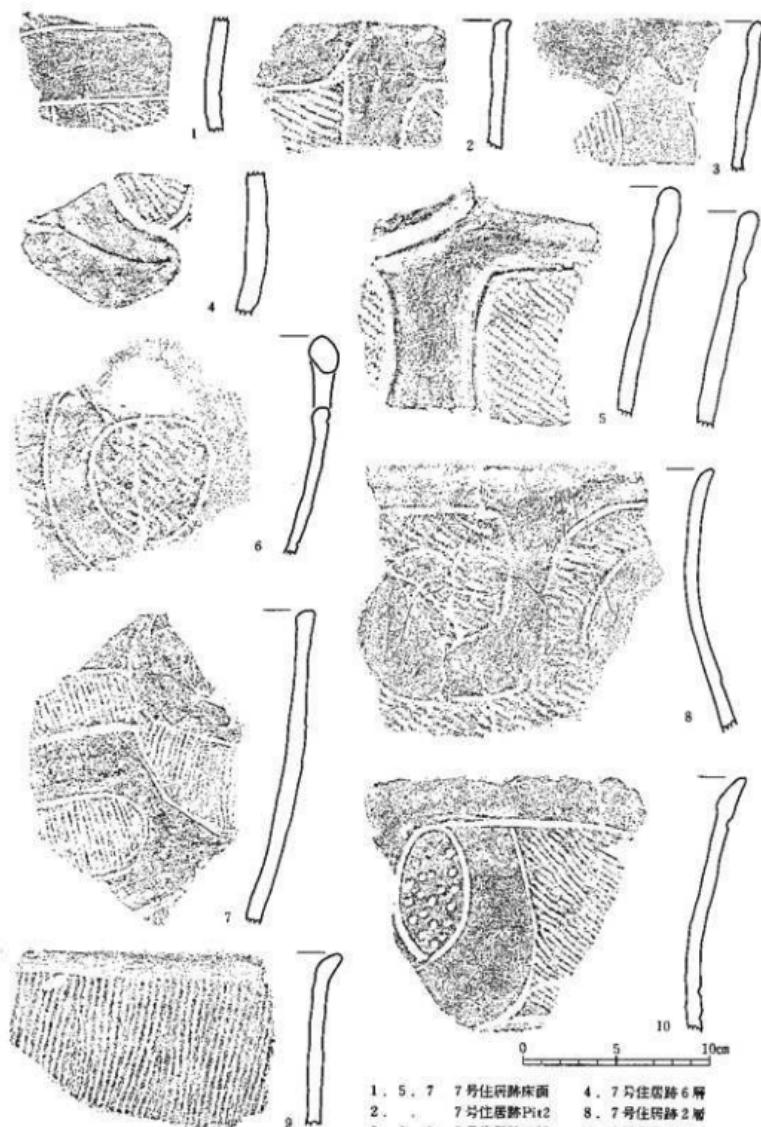
2号埋設土器遺構（写真8）

第6圖 出土遺物 (1)

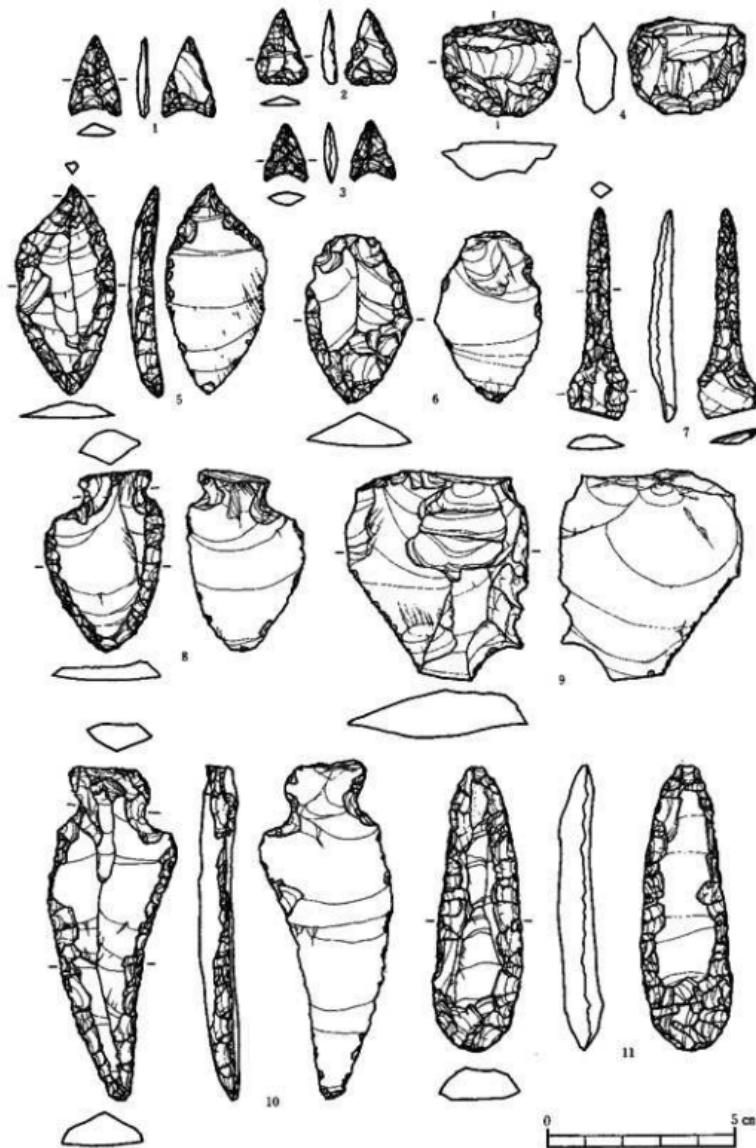


第7圖 出土遺物(2)





第8図 出土遺物(3)



第9図 出土遺物(4)

I区I-27グリッドで検出され、5号住居跡と重複している。直径42cmの円形の掘り方に底部を欠損する縄文土器（写真20の2）を埋めている。掘り方の深さは37cmである。

土 壤

30基が検出され、確認面は第X層と第XI層とがある。

第X層……22号～24号・32号～36号・43号～46号土壤

第XI層……17号～21号・25号～28号・31号・37号～42号・47号・48号土壤

土壤の平面形には円形、楕円形、長方形、不整形のものがあり、断面形には長方形、U字形、舟底形のものがある。大きさ・深さも様々である。遺物は17号・25号・27号・37号土壤で出土しているのみである。

17号土壤

I区F-26・27グリッドで検出され、5号住居跡の南に位置し、21号土壤と重複している。平面形は長軸1.2m、短軸0.9mの椭円形を呈する。深さは20cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は5層あり、暗褐色・黒褐色シルト層が殆どである。堆積土及び底面より縄文土器片が出土している。

22号土壤

I区D-20・21グリッドで検出され、平面形は長軸1.3m、短軸0.7mの長方形を呈する。深さは約1mで、断面形は長方形を呈する。堆積土は5層あり、褐色のシルト・砂質シルト・粘土質シルト層である。遺物は殆どない。

36号土壤

II区F-5グリッドで検出され、平面形は直径1.1mの円形を呈する。深さは45cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は3層あり、褐色の粘土質シルト・砂質シルト層である。遺物は出土していない。

37号土壤

II区H-2グリッドで検出され、平面形は長軸約70cm、短軸約50cmの椭円形を呈する。深さは約20cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は1層である。堆積土中より縄文土器片を出土している。

遺物包含層

基本層位第X・XI層より縄文土器、石器等が出土している。第X・XI層は調査区のほぼ全域に堆積しているが、I区B～F-20グリッドを境として西側では多量の縄文土器、石器が出土するのに対し、東側では遺物は極めて少い。多量の遺物が出土した範囲は、縄文時代の竪穴住居跡が確認された地区と殆ど一致している。出土した土器は大部分が中期末葉（大木10式）から後期初頭のものであり、僅かに中期中葉（大木8b式）のものもある。

(2) 出土遺物

○繩文土器 (第6図、第7図1、第8図、写真19、写真20の1~12)

竪穴住居跡、埋設土器遺構、土壙、遺物包含層より多量の上器片が出土している。殆どが深鉢であるが注口土器、ミニチュア土器もある。深鉢には文様のあるものとないものがある。

図示したものは大部分7号住居跡出土のものであるが6号住居跡出土(第7図1)、5号住居跡出土(第8図10)のものもある。

現段階では、本格的な遺物整理作業を実施していないため不明な点も多いが、文様構成は玉抱連結「S」字状文様、玉抱連結変形「S」字状文様、「U」字状文様、「フ」字状文様、「A」字状文様などがある。文様は体部上半に限定され、隆沈線、沈線で描かれており、無文帶によって生じた区画内には縄文・撚糸文が充填されている。体部下半は縄文・撚糸文のみである。玉抱連結のもの、「A」字状のものは、連結部分、玉を抱いた末端部分、「A」字状無文帯の頂部が鱗状の隆線となっている(第6図、写真19の1~3・6、写真20の3)。刺突文も多用され、口縁部に1~3列に連続刺突文が施されているものや無文帶によって生じた区画内に刺突文が充填されるもの(第6図2、第7図1、第8図10、写真19の3・4・6・7、写真20の3~6)がある。

このような文様をもつ土器は、梨木岡遺跡、菅生田遺跡の大木10式第ⅡB段階の土器群と類似性が見られることより、本遺跡出土のものも大木10式第ⅡB段階に位置づけられよう。

また、方形区画文のもの(写真20の2)は、隆線・沈線によって区画され、隆線には刻目が施される。無文帯の上部は鱗状の隆線となり、区画内にはR L縄文(2例)が充填されている。これと類似するものは、沼津貝塚や六反田遺跡より出土しており、大木10式最終段階に位置づけられている。その他、大木8b式、後期初頭の土器も出土している。

○石器 (第9図、写真21)

石器は剥片石器、礫石器が各遺構より多量に出土しており、特に6・7号住居跡では剝片石器が多く出土している。図示したものは7号住居跡出土のものである。

B. 弥生時代の遺物

I区C-1、II区A-3グリッド第VII層で検出された第29号上層の堆積上1層から弥生時代の甕(第7図1)が出土している。甕形は体部がやや膨らみながら立ち上がり、上半ですぼみ、口縁部へかけて外反している。口唇部には頂部がやくぼんだ山形突起(推定5個)がある。口縁部は若干肥厚し、直下には交互刺突状文様(III縁部肥厚後沈線をめぐらし、工具で一定方向から刺突を施し交互刺突状にしたもの)がめぐる。沈線による鋸歯状文様で区画された体部上半の文様帶には、2段の2本沈線の山形文が施文される。これらの文様の特徴から、この土器は弥生時代後期の犬王山式に比定される。尚、上壙が同時期であるかどうかは不明である。

C. 古墳～平安時代の遺構と遺物

竪穴住居跡

8号住居跡

〔遺構の確認〕 II区G～I-0・1グリッドの第V層（黒褐色シルト）上面で確認され、北東隅は調査区外に延びている。

〔重複、増改築〕 確認されなかった。

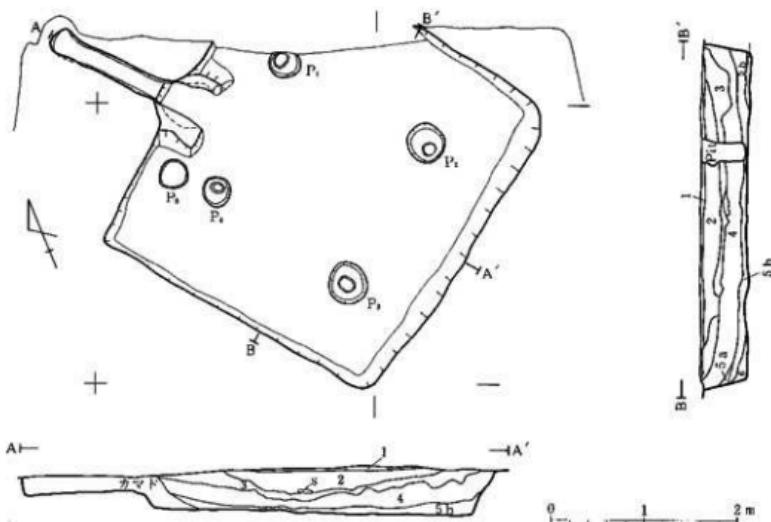
〔平面形・規模〕 平面形は東西3.7m、南北3.5mの方形を呈する。主軸方向はN-40°Wである。

〔堆積土〕 6層に大別される。

1層（褐色シルト層） 最上層である。薄く堆積している。

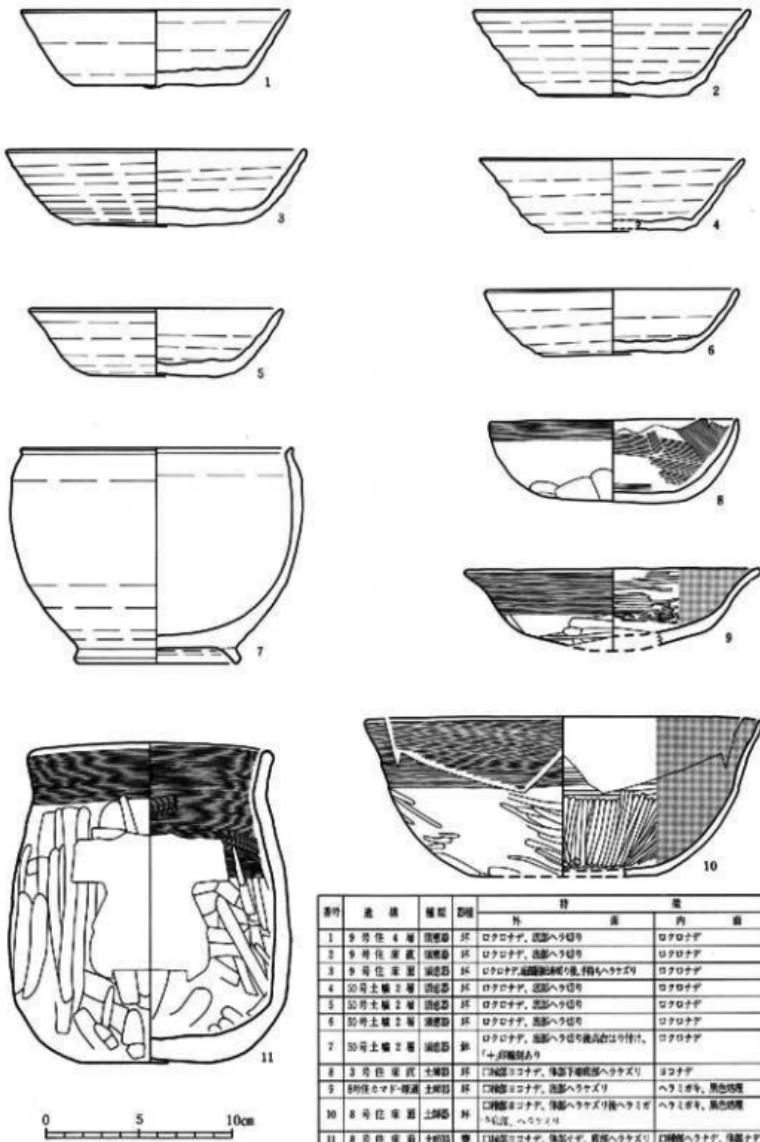
2層（にぶい黄褐色シルト層） 住居跡の壁際を除いて堆積している層で、中央部が厚い。

3層（褐色シルト層） 住居跡のはば全体に堆積している層で、壁に近づくにつれて厚くな



層位	土色	土性	組成物
1	10YR 4/2褐色	シルト	マンガン鉄を含む
2	10YR 4/2にぶい黄褐色	シルト	マンガン鉄を含む
3	10YR 4/2褐色	シルト	炭化物、マンガン鉄、砂を含む
4	10YR 4/2にぶい褐色	粘土質シルト	炭化物、炭化鉄を多量、マンガン鉄を少量含む
5 a	10YR 4/2褐色	シルト	炭化物、炭化鉄を多量、マンガン鉄を少量含む
5 b	10YR 4/2褐色	粘土質シルト	炭化物、炭化鉄、砂を含む
6	7.5YR 4/2褐色	シルト	炭化鉄、マンガン鉄、砂、少量の炭化物を含む

第10図 8号住居跡実測図



第11図 出土遺物 (5)

っている。

4層（にぶい黄褐色粘土質シルト層） 住居跡の全体に厚く堆積している。

5層（暗褐色粘土質シルト層） 住居跡の床面をほとんど覆っている層で、壁に近づくにつれて徐々に厚くなる。多量の炭化物が混じる。

6層（暗褐色シルト層） 住居跡の壁際及び床面に部分的に堆積している。

〔壁〕 第V～IX層を壁としており、壁高は約50cmである。床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁の検出は壁際に薄い炭化物層が存在したため、比較的容易であった。

〔床面〕 第IX層の黄褐色砂質シルトを床面としている。貼り床ではない。床面はほぼ平坦であるが住居の中央部付近は僅かに高くなっている。カマド周辺・柱穴から中心部にかけては非常に堅いが壁際は柔らかである。

〔柱穴〕 床面上より5個のピットが検出されている。そのうち柱穴はP₁～P₄である。掘り方は30～45cmの円形を呈し、柱痕跡は直径約15cmである。

〔周溝〕 検出されなかった。

〔カマド〕 北壁中央部に付設され、燃焼部と煙道部からなる。規模は長さ1.95m（燃焼部63cm、煙道部1.3m）、幅1.05mである。カマドの構築方法は、壁を掘り込んで奥壁とし、にぶい黄褐色、褐色、明黄褐色シルトを積み上げて袖をしている。袖の大きさは、左袖（長さ×幅×最大高）50×40×38cm、右袖（同）40×30×25cmである。煙道部は奥壁より北側にのび、深さ20cmで、底面は殆んど水平で、煙り出し部で垂直に上がっている。底面及び両袖内側は火熱を受けて焼けている。

〔遺物の出土状況〕 カマド・床面より土師器壺・甕が出土している（第11図9～11）。

竪穴遺構

6号竪穴遺構1基がある。II区H・1-6・7グリッドで検出され、21号溝と重複している。平面形は東西3.4m、南北3.4mの隅丸方形を呈する。堆積土上は、4層あり、各層とも多かれ少なかれ炭化物、鉄滓が混入している。底面はほぼ平坦である。ピットは底面上で2個検出され、ピット底面は共に焼けて堅くなっている。出土遺物には羽口、上製紡錘車、鉄滓がある。

掘立柱建物跡

2号建物跡

I区A～D-11～13グリッドで検出され、桁行4間以上（柱間寸法は1.8m等間）、梁行2間（柱間寸法は西より2.3+2.4m）の南北棟建物で、主軸方向はN-19°-Eである。柱穴は一辺約50～130cmの隅丸方形、隅丸長方形の掘り方で柱痕跡は直径約20cmである。

3号建物跡

II区A・B-6・7グリッドで検出され、東西2間（柱間寸法は西より1.8+1.5m）、南北

2間（柱間寸法は1.8m等間）の方形の建物で、主軸方向はN-30°-Eである。柱穴は一辺50～70cmの方形、長方形の掘り方で柱痕跡は直径約20cmである。3号住居跡、51・52号上塙、7号溝に切られている。

4号建物跡

II区A・B-8～10グリッドで検出され、桁行3間（柱間寸法は150～160cm）、梁行2間（柱間寸法は西より150+180cm）の南北棟建物で、主軸方向はN-30°-Eである。柱穴は一辺40～55cmの方形の掘り方で柱痕跡は直径15～20cmである。

5号建物跡 II区I～K-2・3グリッドで検出され、桁行2間以上（柱間寸法は180cm等間）、梁行2間（柱間寸法は西より210+220cm）の南北棟建物で、主軸方向はN-19°-Eである。柱穴は一辺50～250cmの長方形、方形の掘り方で柱痕跡は直径15～20cmである。掘り方は重複しており、同一場所に建て替えている。

土 塚

50号土塚

I区D-7グリッドで検出され、長軸3m以上、短軸2.3mの橢円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは55cmである。堆積土は4層あり、各層及び底面より土師器壺・甕、須恵器壺・鉢（第11図4～7）、円筒硯、鉄製品が出土している。

51号土塚

II区B-6・7グリッドで検出され、長軸90cm、短軸80cmのほぼ円形を呈する。断面形はU字形を呈し、深さは約30cmである。堆積土は6層あり、各層に炭化物・焼土が多量に混じっている。堆積土より須恵器壺が出土している。

溝 跡

5条があり、7・11号溝は第V層上面、12～14号溝は第VI層上面で検出された。7号溝は幅80～100cmで南北に走る溝でII区A・B-6グリッドで途切れている。断面形はU字形で深さ20～24cmである。11号溝は幅40cmで東西に走る溝で、断面形はU字形、深さ20～26cmである。13号・14号溝は共に基本層位第V層黒褐色シルトが堆積している。13号溝は12号溝と重複しており、13号溝が新しい溝で、12号溝と接した部分以北は12号溝の真上を走る。14号溝は3号住居跡、4号掘立柱建物跡に切られている。

小溝状遺構

調査区のほぼ全域に検出され、幅20～30cm、深さ5～8cmのものが大部分である。方向は北西～南東に走るものと東西に走るものと南北に走るものがある。堆積土も暗褐色・褐色・黒褐色シルトがある。

その他、ビットが多数検出されている。

3. まとめ

今回の発掘調査の成果をまとめると次のとおりである。

1. 名取川によって形成された自然堤防上に立地する重層構造の遺跡で、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の遺構、遺物が検出された。
 - a. 穫穴住居跡は3軒検出され、遺物より大木10式期に属するものである。炉はいずれも複式炉であり、6号・7号住居跡の床面には部分的に河原石を敷きならべている。
 - b. 埋設土器遺構は2基あり、確認面が第Ⅹ、Ⅺ層であることから、時間差があると考えられる。
 - c. 土壙は30基あり、確認面が第Ⅹ、Ⅺ層であることから時間差があると考えられる。
 - d. 遺物包含層は第Ⅹ・Ⅺ層の2枚で、縄文時代中期中葉(大木8b式)、中期末葉(大木10式)から後期初頭の遺物が出土している。
 - e. 各遺構・包含層出土の遺物は中期末葉(大木10式)から後期初頭が殆どである。
3. 弥生時代遺物としては後期の天王山式期の甕が2基の土壙より出土している。しかし、その最上層出土であるため、土壙の時期は断定できない。
4. 古墳～平安時代の遺構は、竪穴住居跡、竪穴遺構、掘立柱建物跡、土壙等が検出され、土師器、須恵器、鉄製品等が出土している。
 - a. 穫穴住居跡は4軒検出され、遺物より栗原式期、国分寺下層式期、表杉ノ入式期に属するものである。
 - b. 穫穴遺構は1基検出され、鉄滓、羽口等が多く出土している。
 - c. 掘立柱建物跡は4棟検出されている。
 - d. 土壙は3基検出されている。そのうち1基は遺物より国分寺下層式期のものである。
 - e. その他、溝跡、ピット、小溝状遺構が検出されている。

写真1 繩文時代の遺構
全景(23~30列)
(西→東)



写真2 7号住居跡
(1号炉) 全景
(北→南)



写真3 7号住居跡
(2号炉) 全景
(北→南)





写真4 7号住居跡2号炉
(南→北)



写真5 5号住居跡全景
(南→北)



写真6 5号住居跡
遺物出土状況
(北→南)

写真7 1号埋設土器遺構
(西→東)



写真8 2号埋設土器遺構
断面
(南→北)



写真9 古墳～平安時代の
遺構全景
(西→東)



写真10 8号住居跡全量
(南→北)



写真11 9号住居跡全景
(西→東)



写真12 9号住居跡カマド
全景
(西→東)



写真13 10号住居跡全景
(西→東)



写真14 6号竪穴遺構全景
(東→西)



写真15 51号土壙全景
(西→東)

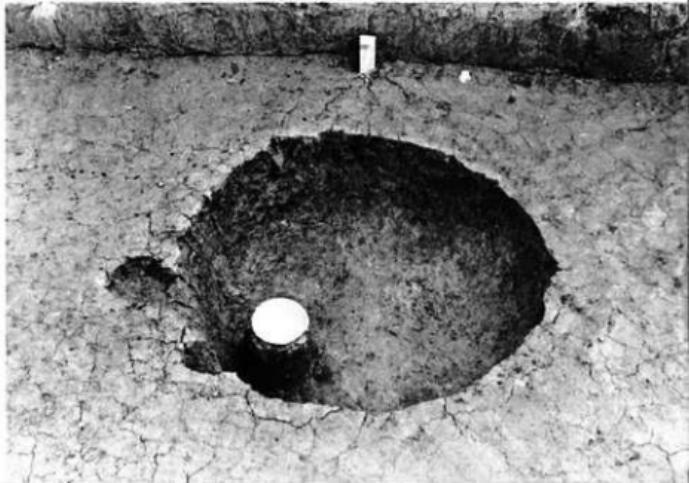


写真16 2号掘立柱建物跡
全景
(北→南)



写真17 3号・4号掘立柱
建物跡全景
(南→北)



写真18 5号掘立柱建物跡
全景
(北→南)





1



2



3



4



5



6



7

1. 7号住居跡2号炉1号埋設土器(第6図1)
2. 7号住居跡2号炉2号埋設土器
3. 7号住居跡1号埋設土器(第6図2)
4. 7号住居跡2号埋設土器
5. 7号住居跡1号埋設土器
6. 7号住居跡5号出土
7. 6号住居跡(第7図2)

写真19 出土遺物(1)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13

1. 1号埋設土器遺構
2. 2号埋設土器遺構
3. 7号住居跡
4. 7号住居跡
5. 7号住居跡(第8図5)
6. 5号住居跡(第8図10)
7. 7号住居跡(第8図6)
8. 7号住居跡(第8図8)
9. 7号住居跡(第8図7)
10. 7号住居跡(第8図9)
11. 7号住居跡(第8図4)
12. 5号住居跡
13. 2号土壙(第7図1)

写真20 出土遺物(2)

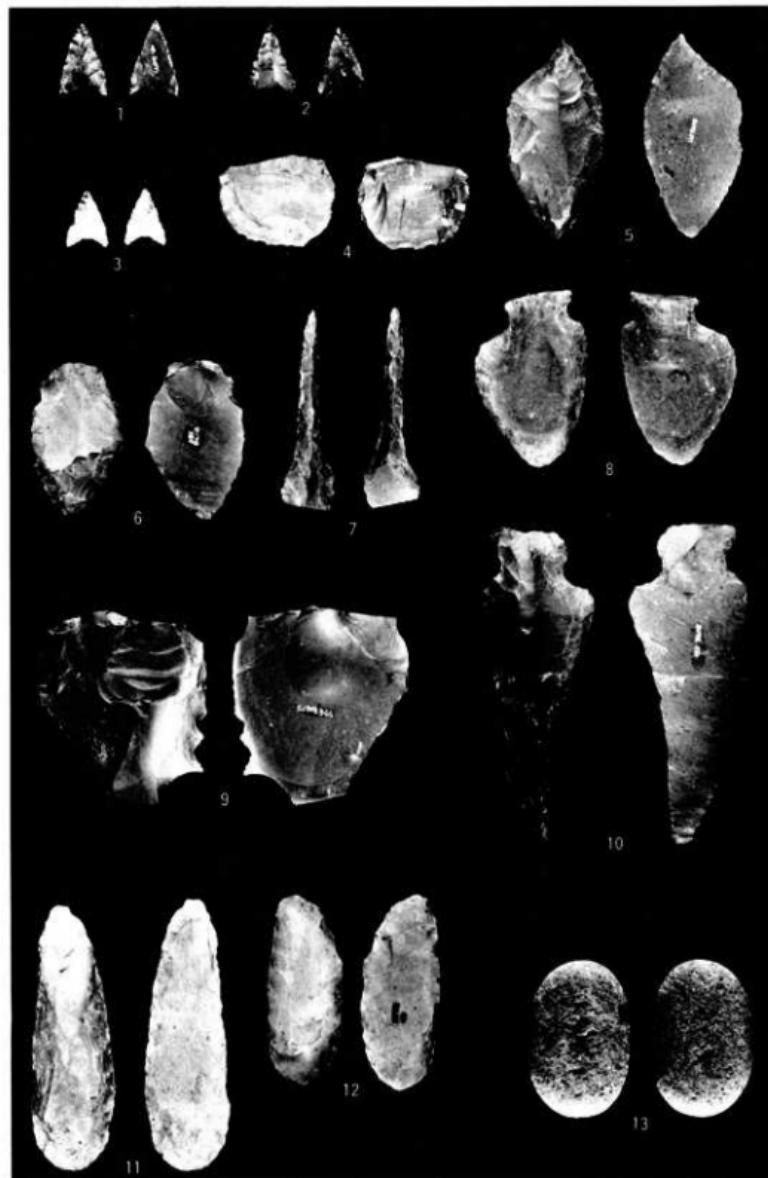
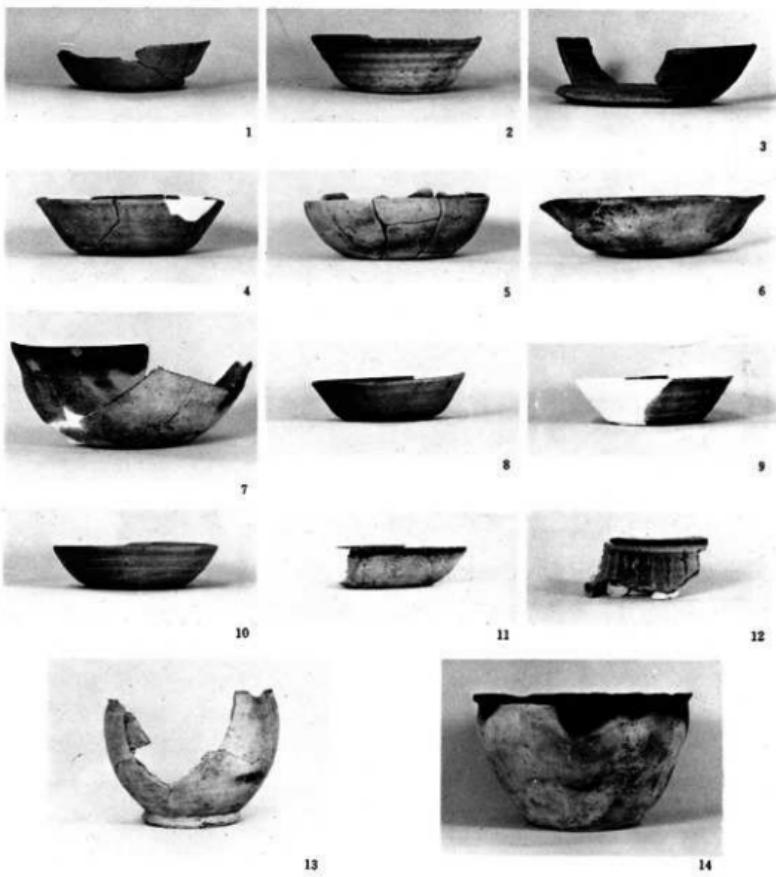


写真21 出土遺物(3) Scale; 1~12-約2/3 13-約1/4



1. 9号住居跡(第11図1) 2. 9号住居跡(第11図2) 3. 9号住居跡(第11図3)
 4. 10号住居跡 5. 3号住居跡(第11図8) 6. 8号住居跡(第11図9)
 7. 8号住居跡(第11図10) 8. 51号土壺 9. 50号土壺(第11図4)
 10. 50号土壺(第11図5) 11. 50号土壺(第11図6) 12. 50号土壺
 13. 50号土壺(第11図7) 14. 50号土壺

写真22 出土遺物(4)

IV. 泉崎前遺跡

1. 遺跡の立地

泉崎前遺跡は、東北本線長町駅の南西約1.5kmに位置し、名取川と広瀬川とにより形成された後背湿地に立地する。付近は土地区画整理事業により盛土され宅地化が進行しているが、以前は水田として土地利用されていた。旧水田の標高は10.5m前後である。

2. 調査の方法

泉崎東工区北半部分（七北田起点から13.059～13.370km）の試掘調査の結果、13.335km地点^(註8)で畦畔が確認されたため、13.314～13.355kmを本調査に移行した。11×51mの調査区Ⅰ区を設定し、南北に4～50、東西にA～Cの6×6mグリッドを組み調査を実施した。

3. 調査の概要

基本層位 層位は33層確認された（第12図7、写真25）。1層は旧水田の耕作土である。2・3層はシルト層、4～23層は黒褐色・褐灰色系統の粘性の強いシルトないし粘土層であり、未分解の植物遺体を多量に含有する。24層以下は青灰色系統の粘土および砂層となり、33層が沖積層^(註9)の基底礫層である。

試掘 4層で畦畔状の盛り上がりが検出され、L状に直交することや、水口状の凹部が確認されたことから水田跡と判明した。時期は、3・4層に土師器・須恵器が含まれることや5層上面に灰白色火山灰がのことから平安時代と捉えられる。一方、プラント・オパール分析^(註10)からも4層、11層に水田跡の存在が予想された。

遺構と遺物 試掘の結果や近隣する山口遺跡の成果から、この後背湿地に古代の水田跡の存在が予想されたため本調査を実施した。その結果、平安時代の2時期の水田跡2面（I・II）、11層で畦畔状遺構1条、溝状遺構内の杭列を検出した。

水田跡Iは4層で検出された（第12図1、写真23）。標高は10m前後である。細長い調査区のため水田1枚を完全な形で検出することはできず、水田1枚の面積・形状等の詳細は不明である。しかし、比較的良好な状態で検出された水田が4枚存在する（水田①～④）。付属施設として水口を3カ所検出したが、水路等の施設は確認されなかった。水田①～④の高低は②=④→③→①の順で低くなる。畦畔の幅は上部で30～60cmであるが、一部では1mを測る。畦畔の方向は、水田①・②の南辺の畦畔が東西に走行し、他は北東ないし北西方向である。水田跡Iに伴う遺物は出土していない。

水田跡IIは5層で検出された（第12図2、写真24）。標高は9.9m前後である。5層上面には平安時代に降下した灰白色火山灰がのっており、畦畔遺構検出の手掛りとなった。水田跡I同様完全な形の水田は1枚も検出されていないので、面積・形状は不明である。畦畔の位置は水田

跡Ⅰとほぼ同位置である。比較的良い状態で確認された水田が4枚ある(水田⑤～⑧)。付属施設として水口を2カ所検出した。水田の高低は⑥と⑧がほぼ同レベルで高く、③と⑦が同レベルで低くなっている。畦畔の上幅は40～60cmである。方向は水田⑤・⑥の南辺と⑧の北辺の畦畔が東西方向であり、他は北東ないし北西の方向である。遺物は水田⑤の作土上面ならびに作土中から赤焼土器片が数点出土している。

プランツ・オバール分析により11層に水田の存在が予想された。しかし、B-50グリッドの西側で畦畔状の遺構が1条確認されただけである(写真26)。その上幅は1m、下幅1.3m、長さは約3.6m、高さ約5cmを測る。方向は北東一南西である。
(註13)

杭列は調査区北端の12層上面で確認された溝状遺構の堆積土上層中から検出された(第12図6、写真27)。長さ約2～2.5mの杭2本が幅60～70cmの間隔で横たわり、そのなかにはほぼ東西方向に10数本の杭が並ぶ。杭は30～70cmの間隔であり、上端部はほぼ標高9.6m、下端部が標高9mである。杭の長さは50～85cmで下端部は加工されている。上端部が南へ傾くものが多いが北や東へ傾くものもある。何らかの施設と考えられるが、畦畔や水路等の施設が伴わないのでその性格は不明である。

杭列検出と同一面より有孔の木製品(写真37-1)が出土している。完形ではないが農耕具と考えられる。他に12層上面から丸木弓(写真37-2)、各層から種子類が出土している。

4.まとめ

平安時代の水田跡が2面確認されたが水田経営の具体的な内容は不明な点が多い。また、11層での水田の有無、時期の問題なども残された課題である。さらに、今後条里制や周辺に存在が予想される集落跡との関連も大きな課題となろう。

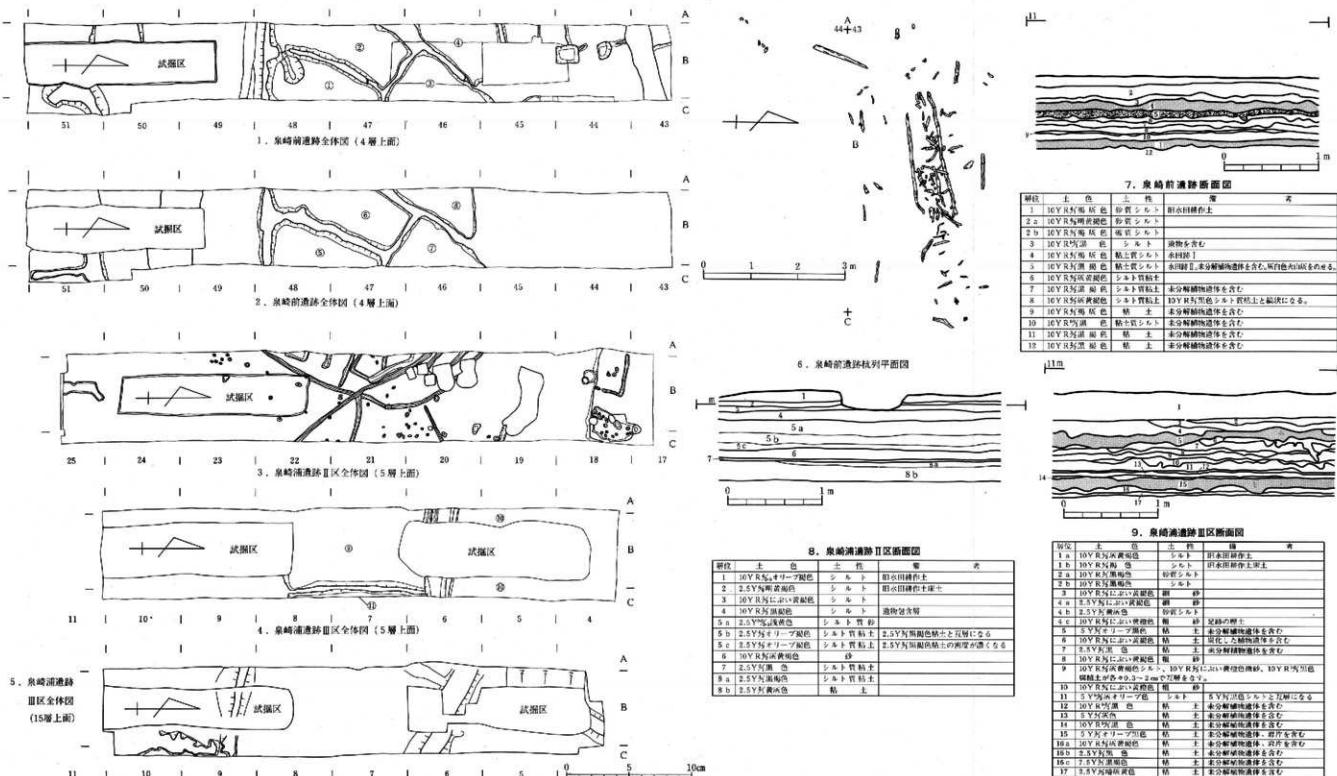
V. 泉崎浦遺跡

1. 遺跡の立地

泉崎浦遺跡は長町駅の南西約1.5kmに位置し、広瀬川と名取川とにより形成された後背湿地と、その中にあらわる微高地に立地する。微高地は小規模な扇状地の末端部で標高は11.3mであり、盛土以前は畠地として土地利用されていた。周辺の後背湿地も盛土以前は水田として土地利用されており、標高は10.8m前後である。

2. 調査の方法

泉崎東工区北半部の試掘調査の結果、微高地で住居跡、遺物包含層、北側の後背湿地で畦畔状遺構が確認されたため、13.079km～13.120kmに本調査区Ⅲ区、13.158～13.208kmに本調査区Ⅱ区を設定した。Ⅱ区は11×50mの調査区で、南北に17～25、東西にA～Cの6×6mのグリ



第12図 泉崎前道路全体図1.2断面図(7)柱列平面図6、泉崎浦遺跡Ⅱ区全体図3断面図8、Ⅲ区全体図(4.5)断面図9

ッドを組んだ。Ⅲ区は11×41mで南北に4~11、東西にA~Cの6×6mのグリッドを組んだ。なお、Ⅱ区は微高地、Ⅲ区は後背湿地に位置する。

3. 調査の概要

Ⅱ区とⅢ区では立地が異なり、基本層位の対応が困難であったため、概要については別個に述べる。

(1) Ⅱ区の概要

基本層位 基本層位は1~8層まで確認されたが、基底礫層までは確認していない(第12図8)。1・2層は旧水田耕作土層である。4~6層がシルトないし砂層、7・8層が粘土層となる。

試掘 微高地から後背湿地に変換する部分に2ヵ所設定した。微高地から古墳時代の住居跡のプラン、変換部分に遺物包含層が確認されたため、本調査へ移行した。

遺構と遺物 江戸時代後期の墓塚群、古墳時代の住居跡、溝状遺構、ピット、遺物包含層が確認されている(第12図3)。

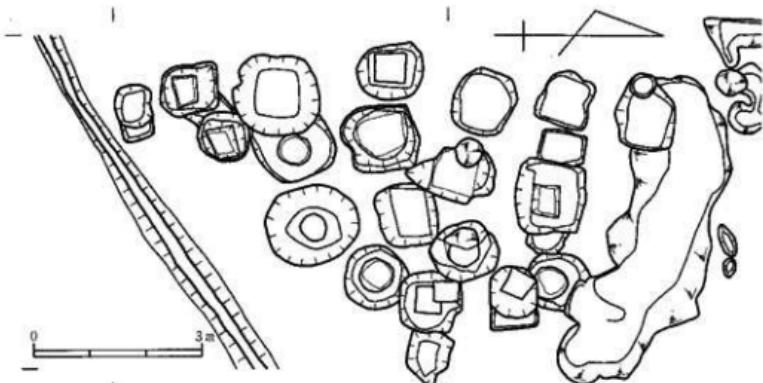
〈江戸時代〉 墓塚群は3層上面で27基検出された(第13図1)。標高は約10.7mである。北東一南西方向に走る当時の畦畔に区画された一画に密集している。木棺、木棺片、桶等が残存するものは7基である。木棺は一辺が50~60cmの正方形、深さ30~50cmである。桶は径45~50cm、深さ40cm程度である。掘り方のプランは円形ないし方形で、径は1~1.5m、深さ約80cmである。

7号墓塚(写真29)では人骨が良好に遺存していた。被埋葬者は40才以上の頑強な男性である。

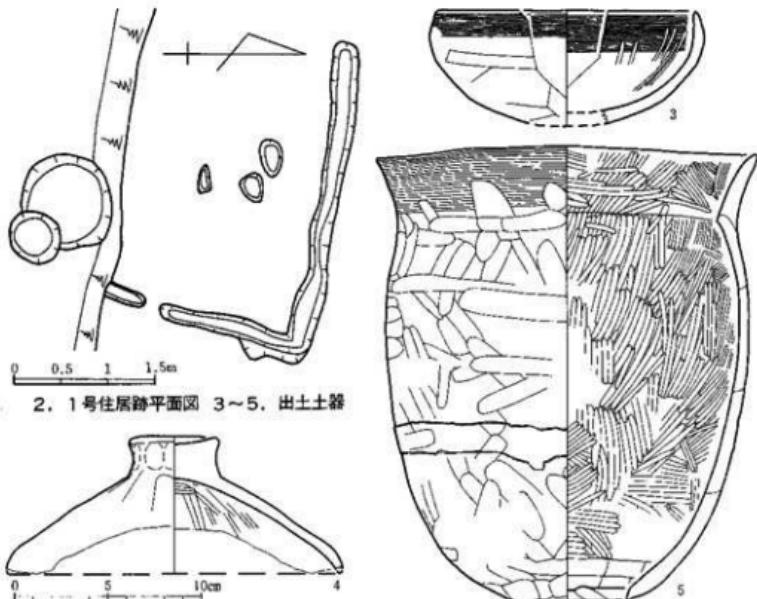
4号墓塚(写真30)では箸1膳をのせた茶碗と提燈2箇が出土した。他の副葬品(写真37~3~8)として陶磁器、提燈、箸、鳥形木製品、煙管、柄鏡、櫛、寛永通宝などがある。

〈古墳時代〉 1号住居跡(第13図2、写真31)は5層上面で検出された。標高は11m前後であり、耕作土直下で確認された。西側と南側が後世の擾乱により破壊されており、南北2.3m、東西3.5m残存しているのみで規模は不明だが、平面形は方形と考えられる。検出面から床面までの深さは5cm程度で、北側に壁が一部残存している程度である。壁際に幅20cm、深さ5cmの周溝が南北2.3m、東西3.5m確認された。床面から土師器壺、甌(第13図3、5、写真37~10、11)・甌・蓋(第13図4、写真37~9)等が出土している。壺は丸底で、体部から口縁部へ丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は内寄する。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリである。内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラミガキである。甌は最大径が口縁部にあり、体部はやや膨らみをもち口頭部は外反する。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部上半がナデ、下半がヘラケズリとナデである。内面は孔がヘラケズリ、他はヘラミガキである。蓋は天井部から口縁部へ直線的に開き、口縁部がやや内傾し、短い円筒状のつまみがつく。器面調整は外面がナデ、内面がヘラミガキである。

住居跡の南に隣接してピット4・5が検出された。ピット4がピット5を切っている。確認面は最近の耕作のため住居跡確認面より15cm程低く、住居跡に伴う遺構であるかどうかは不明である。



1. 墓塚群平面図



2. 1号住居跡平面図 3~5. 出出土器

第13図 泉崎浦遺跡墓塚群平面図、1号住居跡平面図・出土遺物

溝状遺構は4層下部から5層上部で9条検出されている。規則性は看取できず、性格は不明である。

4層は遺物包含層でB-19グリッドより南に分布している。標高は10.4~10.7mで南へ緩く傾斜している。B-21・22グリッドに遺物の集中がみられる。

(2) III区の概要

基本層位 層位は1~17層確認されている(第12図8)が、II区との対比は困難であった。

1層が水田耕作土、2~4層がシルト及び砂層、5層以下が黒褐色・灰色系統の粘土層である。

試掘 微高地北側の後背湿地に2カ所設定し試掘を行なった。その結果砂層を除去した時点^(写真17)で東西の畦畔が検出された。また、プラント・オバール分析により、15層に水田跡の存在が予想され、試掘でも東西方向の畦畔状盛り上りを確認した。

遺構 平安時代の水田跡Iと足跡、平安時代以前の水田跡IIが検出されている。

水田跡Iは砂層(4層)に覆われており、5層上面で確認された(第12図4、写真32)。標高は10.4m前後である。細長い調査区のため水田1枚を完全に検出することはできず、水田1枚の面積・形状等の詳細は不明である。畦畔は東西方向と南北方向に各1条確認された。その上幅は30~40cm、下幅は70~100cmである。東西方向の畦畔の南側に幅約1.5m、深さ10cmほどの溝状遺構が確認され、水利施設と考えられる。水田の高低は、水田⑨、⑩がほぼ同レベルで水田⑪が約10cm程低くなる。作上上面および畦畔上に砂層を堆積土とする人・牛の足跡が確認された(写真33~35)。両者とも歩行の方向性は看取不可能であった。足跡数は牛の方が圧倒的多數である。牛の足跡は蹄の先が二股に分れた状態で確認されており、人の足跡も指先の判るものもある。この水田の時期は、砂層中に灰白色火山灰をのせる面が存在することから、平安時代に比定されよう。

水田跡IIは、プラント・オバール分析で予想された15層上面で検出された(第12図5、写真36)。標高は9.8m前後である。水田の枚数、規模、形状、付属施設は不明である。畦畔は南北方向1条、北西方向2条、北東方向1条が確認された。畦畔の上幅は0.6~2mで大畦畔と考えられるが、対応する小畦畔は検出されたかった。水田の高低差も詳細は不明である。水田跡IIの時期は、水田跡Iより下位ということで平安時代以前として捉えておきたい。

4.まとめ

時代は異なるが微高地上に生活の場、低地に生産の場が確認された。このことは、この一帯に各時期の生活の場と生産の場とがセットで存在しているであろうこと、当該地域が古代の生活の場、生産の場、墓域等を有機的に解明していく上で重要なフィールドと成り得ることを示唆するものであろう。

泉崎前遺跡

写真23 水田跡 I 検出状況
(北→南)



写真24 水田跡 II
検出状況
(北→南)



写真25 東壁土層断面
(西→東)



写真26 11層検出
畦畔状造様
(北東→南西)



写真27 杖列
(東→西)



泉船浦遺跡

写真28 墓塚群
(北→南)



写真29 7号墓塚人骨検出
状況

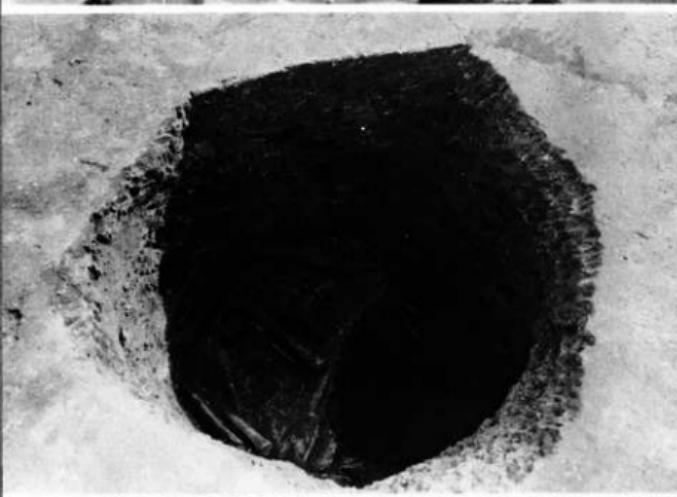


写真30 4号墓塚副葬品
検出状況

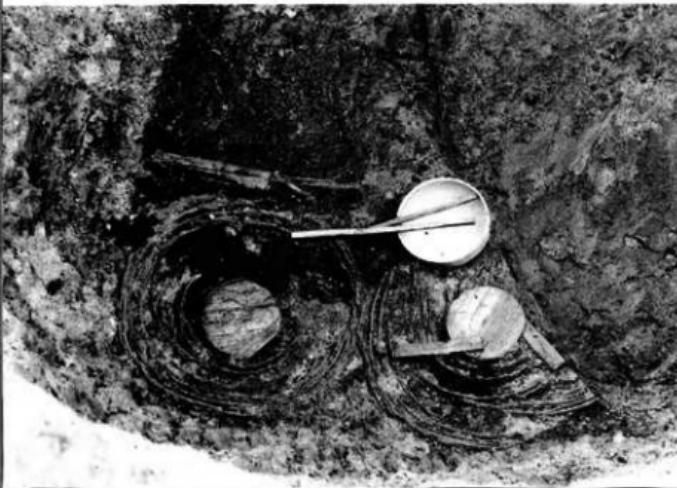


写真31 1号住居跡全景
(南→北)



写真32 水田跡Ⅰ畦畔
検出状況
(東→西)



写真33 水田跡Ⅰ足跡
検出状況
(東→西)



写真34 水田跡Ⅰ牛足跡
検出状況



写真35 水田跡Ⅰ人足跡
検出状況
(東→西)

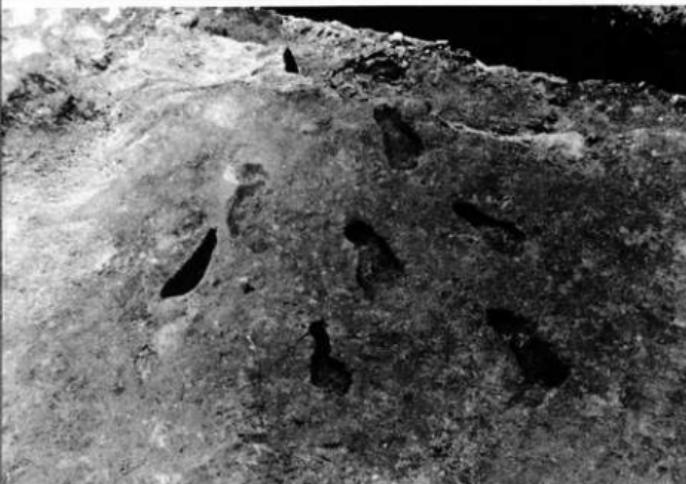


写真36 水田跡Ⅱ畦畔断面
(南→北)



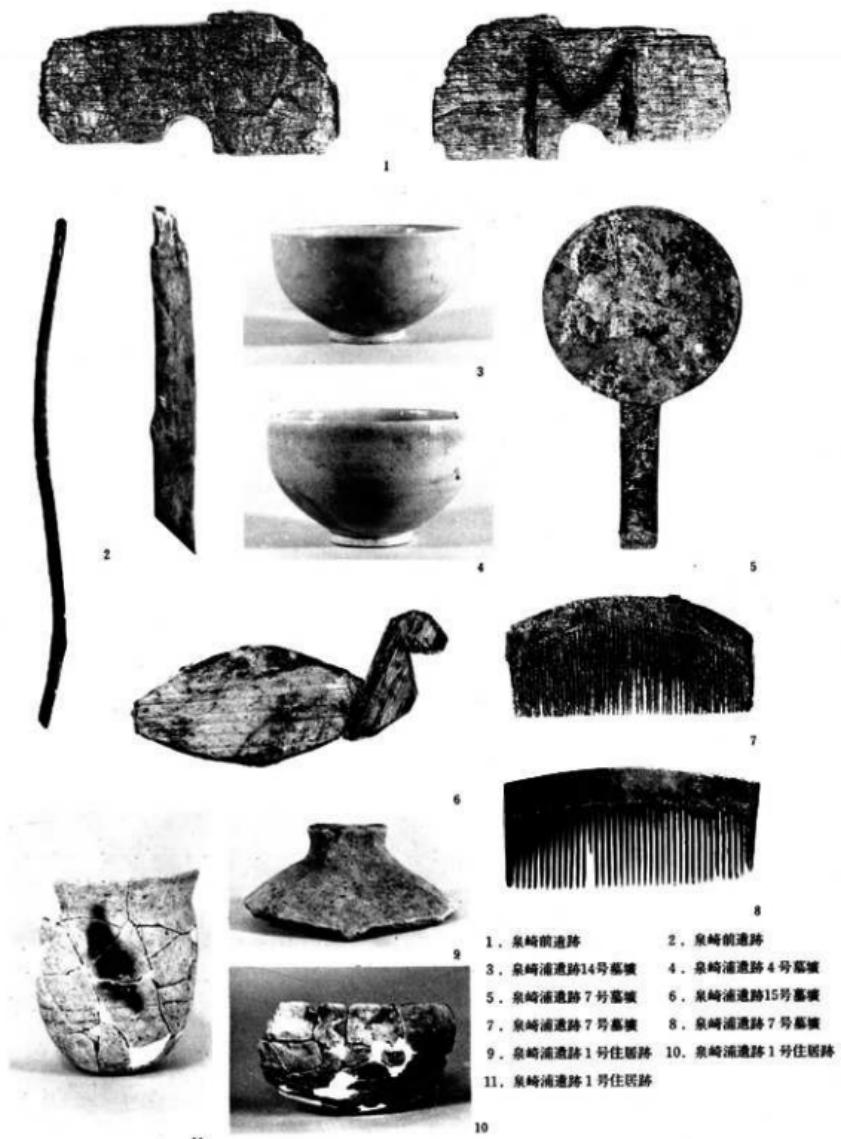


写真37 泉崎前、泉崎浦遺跡出土遺物

VI. 中谷地遺跡

1. 遺跡の立地

中谷地遺跡は、東北本線長町駅の西方約1.2kmに位置し、主に広瀬川によって形成された後背湿地に立地している。現在は上地区画整理事業によって1.0~1.4mの盛土がなされているが、旧水田面標高は11.2~10.7mである。近隣の遺跡としては、東方に鳥居原、南方に泉崎浦、泉崎前などの遺跡が存在する。

2. 調査の方法

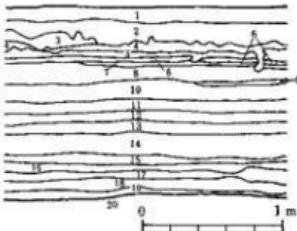
中谷地工区は、仙台市高速鉄道七北田起点より、12.560kmから13.059kmまでの延長499mである。その間に5×10mのNo9~No20、5×40mのNo21の試掘区を設定し、試掘調査を開始した。その結果、試掘区No9~No13において畦畔遺構が確認されたため、高速鉄道路線幅での本調査に移行した。この本調査部分は、地下埋設管と道路で切られているため、北からI、II、III区と設定した。また試掘区No21において、鳥居原遺跡（鍋田工区）から続くと思われる畦畔遺構が確認されたが、この部分についての本調査は、来年度実施する予定である。なお、試掘、本調査とも、盛土をバックホーで掘り上げた後、人力による調査を行なった。

3. 調査の概要

基本層位は、1~20層まで確認された。その中で検出された遺構は、中世と思われる水田跡1面と、平安時代の水田跡1面である。

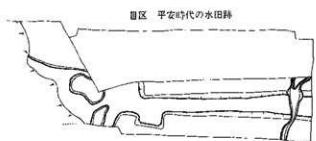
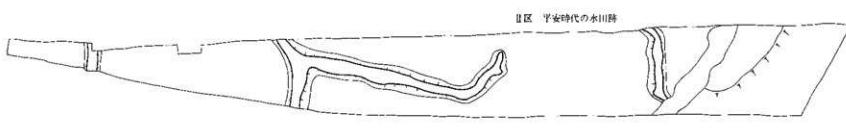
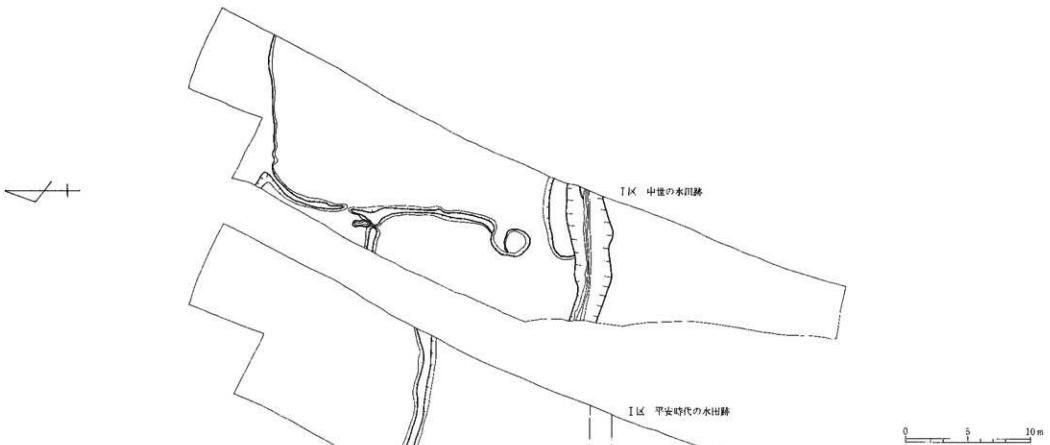
中世と思われる水田跡は、基本層位第3層上面で検出された。この水田跡は、I区でのみ検出され、水口なども確認された。しかし水田の一区画は判明しなかった。なおI区北側試掘区No15の同層からは、北宋錢などが出土している。

平安時代の水田跡は、基本層位第4層上面で検出された。この水田跡はI・II・III区において、畦畔の上部に灰白色火山灰が堆積した状態で確認された。水田の一区画は判明しなかったが、I区において検出した畦畔の間隔は26m程度である。



第14図 基本層位

層位	地	性	備
1	7.5YR 4/2 黄褐色	砂質土	水田を多量に含む
2	10YR 5/3 黄褐色	粘土	水田、バシスを含む
3	5YR 5/2 灰褐色	砂質シルト	水田、バシスを含む
4	7.5YR 4/2 灰褐色	粘土	水田を含む
5	5GY 5/4 1~5%泥	粘土	炭化物及び礫塊物を含む
6	7.5YR 4/2 黄褐色	シルト	植物遺体を含む
7	10YR 4/2 黄褐色	粘土	植物遺体を含む
8	5YR 4/2 黄褐色	シルト	植物遺体を含む
9	10YR 4/2 黄褐色	粘土	植物遺体を含む
10	2.5YR 5/3 黄褐色	粘土	鉄物質含む
11	2.5YR 5/3 黄褐色	粘土	植物遺体を含む
12	10YR 4/2 黄褐色	粘土	植物遺体を含む
13	5YR 5/2 黄褐色	粘土	水田に多量の植物遺体を含む
14	7.5YR 4/2 黄褐色	粘土	植物遺体を含む
15	10YR 4/2 黄褐色	粘土	植物遺体を含む
16	7.5YR 4/2 黄褐色	粘土	植物遺体を含む
17	2.5YR 5/3 黄褐色	粘土	水田に多量の植物遺体を含む
18	10YR 5/3 黄褐色	粘土	植物遺体を含む
19	10YR 4/2 黄褐色	粘土	水田に多量の植物遺体を含む
20	5YR 5/2 黄褐色	砂質シルト	



第15図 遺構平面図

写真38 I区中世と思われる水田跡全景
(南→北)



写真39 I区平安時代の水田跡全景
(南→北)



写真40 II区平安時代の水田跡全景
(南→北)



VII. 鳥居原遺跡

1. 遺跡の立地

鳥居原遺跡は、東北本線長町駅の西方約800mに位置する。主に広瀬川によって形成された後背湿地に立地し、標高は10~11mである。調査対象区域は、高速鉄道南北線の起点七北田より12.316km~12.560kmの（仮称）鍋田駅部分であり、面積は4145m²である。この区域は本遺跡の北部にある。近隣には金岡八幡古墳、中谷地遺跡、泉崎浦遺跡、袋東遺跡がある。

2. 調査の方法

12.407km~12.512km間に7ヶ所のトレンチ（6×8m）を設け、試掘調査を行なった。その結果、水田跡であることが確認されたため、今年度は対象区域の東半12.316km~12.420kmの本調査を行なった。尚、12.420km~12.560kmは来年度調査予定部分である。

3. 層位

基本層位は1層から30数層まで確認されたが、本遺跡で共通する層位は1~8層までである。9層以下は深掘り、試掘により確認された層であり、詳細な検討を加えていないため現段階では対応関係は不明である。1~8層は1層旧耕作土、2層シルト層、3層粘土層、4層以下の泥炭層から成り、3層上面には平安時代に降下したと考えられる灰白色火山灰が部分的に見られる。また4層以下の泥炭層の堆積は9層以下でも、部分的に砂層を挟みながらではあるが、連続してみられ、ある層から砂層へと変化する。この砂層下には沖積層の基底疊層が存在するが、確認することはできなかった。尚、本調査深掘り区33層は火山灰の堆積層である。

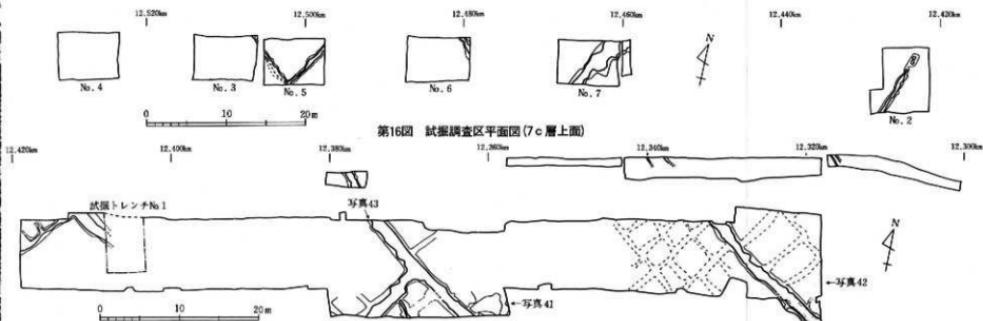
4. 調査の概要

今回の調査では、2時期の水田跡を検出した。新しい時期の水田跡は3層上面で検出され、灰白色火山灰によって部分的に覆われているので平安時代の水田跡と考えられる。畦はほぼ南北方向に走っている。しかし試掘区で検出されただけであるので、一区画の面積やその他の関連構造については不明である。

また、平安時代の水田跡よりも50~60cm下位の7c層上面で、7b層との色調の相違から、更にもう一面の水田跡を検出した。大畦には、N-32°~37°E、N-56°~59°Wの2つの方向があり、幅は下端幅で170~220cmである。畦は周囲の土を盛り上げてつくられており、その断面形は扁平な台形状を呈する。水田面は大畦によって高位の面と低位の面に区別される。低位の水田面からの畦の立ちあがりが急激であるのに対して、高位からのそれは非常にゆるやかである。畦を形成する土と耕土は色調・土性において若干の差異が認められる部分もあるが、それほど明瞭ではない。大畦間からは小畦が一部分において検出された。それを形成する7c層は非常に軟かく、小畦の大半は土圧によって潰されているようである。しかし、部分的に検出され

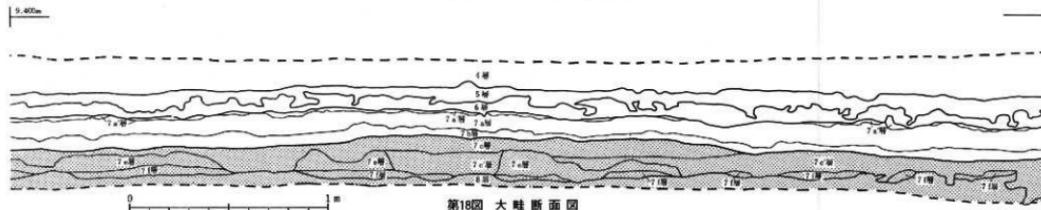


写真41 脚検出状況



第17図 本調査区平面図(7c層上面)

層位	土色・土性
4	10YR 黄褐色粘土と5Y 为灰黑色土に混ざる
5	2.5Y 黄褐色粘土
6	10YR 黑灰褐色粘土
7a'	2.5Y 黑灰色粘土
7a	10YR 黑灰色粘土
7b	10YR 黑树皮色粘土
7c	2.5Y 黑灰色粘土
7d	10YR 黑腐泥粘土
7e	10YR 黑褐色粘土と30YR 黑褐色粘土に混ざる
7f	7.5Y 黑褐色粘土
8	10YR 黑灰褐色粘土



第18図 大畦断面図



写真42 本調査区全景

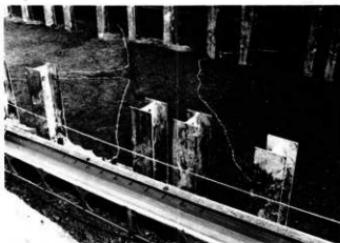


写真43 畦検出状況



写真44 土層断面（試掘トレンチNo. 6）

たところでは、小畦の方向は大畦に直交もしくは平行する傾向が強く、この水田跡は規格性をもった水田形態であるといえる。確認された水田は、 $2 \times 3 \sim 4 \times 6.5m$ の大方に区画されており、面積は約 $6 \sim 26m^2$ である。また、本調査区における水田面の標高は $8.4 \sim 8.8m$ であり、西方が高く東方に向かって徐々に低下している。水田面には凹凸がみられ、人間の行動の痕跡を示すものと考えられる。その一部は足跡と判断されたが、歩行方向を追うことはできなかった。

また、大小の畦・足跡以外に、一部で大畦と小畦の接合部に杭列が検出されている。しかし明確な灌漑・排水のための施設と考えられるような構造は確認されていない。出土遺物は非常に少なく、土器片2点のほか、木製品・木片・クリとクルミの実が出土したのみである。ただ、それが畦中・畦上及びその付近からのみ出土していることは興味深い。出土した土器片はきわめて小さく、それによって時期を決定することはできないため、現時点においてはこの水田跡は平安時代以前に属するものとしかいえない。この水田跡は、鉄分・マンガンの集積層がその床土にみとめられず、後背湿地であるという立地ともあわせて、中間型・地下水型といわれる半湿田・溼田であった可能性を指摘できよう。
(註4)

註

- 註1) 地図研仙台支部編 1980 『新編 仙台の地学』
- 註2) 経済企画省 1967 『地形・表層地質・セイヨウ 仙台』
- 註3) 中山 喬他 1976 「仙台平野西縁・長町一利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』第28卷第2号 p. p. 111~120
- 註4) 松本秀明氏の御教示による。
- 註5) 文様に対する呼称は原則的に菅生田遺跡(1982.9)に依った。
- 註6) この文様の土器は、「フ」字状文様・玉抱連続変形「S」字状文様の土器と共に7号住居跡堆積土5層中より出土していることから一応大木10式第II B段階として扱った。今後5層出土の土器の吟味を行ない明確に伴うものなのか本報告にゆだねたい。
- 註7) 沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書(第17回版2、第20・21回版)や六反田遺跡(第46回)に方形区画のものが報告されており、大木10式最終段階に位置づけられている。
- 註8) 調査は工事上区ごとに実施したため、泉崎東上区の本調査3カ所を便宜上南からI区・II区・III区と呼称した。
- 註9) 松本秀明 1981 「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』第54卷第2号 p. p. 72~84
- また、仙台市では高速鉄道南北線建設に伴なうボーリング調査を行なっており、その結果によると基底層の上面の標高は鳥居原遺跡で $2 \sim 3m$ 、中谷地遺跡で $3 \sim 5m$ 、泉崎浦遺跡で $4m$ 、泉崎前遺跡で $7m$ 、下ノ内遺跡で $8m$ である。
- 註10) 川子貞雄・山田一郎 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡一昭和54年度発掘

白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』1、p. p. 1~38 宮城県多賀城跡研究所
なお、泉崎前遺跡・鳥居原遺跡の灰白色火山灰については分析は行なってはいないが、庄子貞雄氏に
来訪いただき、宮城県に分布する灰白色火山灰と考えられる旨の御教示をうけた。また泉崎浦遺跡・中
谷地遺跡で確認された灰白色火山灰も同様のものと考えられる。

- 註11) 試掘の段階で宮崎大学の藤原宏志氏にプラント・オパール分析を依頼した。その結果、4・11層に水
山跡の存在が予想されるとの御教示を得た。
- 註12) 仙台市教委 1980「山口遺跡」現地説明会資料
山口遺跡では平安時代の水田跡が検出されている。現在報告書作成中。
- 註13) 南から落ちこむ状況を確認したに過ぎず、溝状か、河川状か、沼状であるかは不明。一応「溝状」と
呼称しておく。
- 註14) 註8参照
- 註15) 東北大学医学部の山田格氏の御教示による。
- 註16) 江戸時代の墓壙群検出面より標高が高いのは、住居跡がもともと敵高地であった附畠地に埋蔵されて
いたためである。
- 註17) 宮崎大学農学部の藤原宏志氏の御教示による。
- 註18) 註10参照
- 註19) 試掘トレンチNo.21において、7c層上面で畦状の盛り上がりを検出したため、基本層3~11層のプラン
ト・オパール分析を宮崎大学の藤原宏志氏に依頼した。その結果、7c層にはイネのプラント・オパール
が含まれていることが確認され、当試掘トレンチが水田跡であったか、近傍に水田があったかのどちら
かであるとの御教示を得た。また試掘調査の進展に伴ない、他の試掘トレンチでも同様に7c層上面で畦
が検出されるに及び、調査対象区は水田跡であることが明らかとなった。
- 註20) 註10参照
- 註21) 註4・註9参照
- 註22) 33所は庄子貞雄・山田一郎両氏による分析の結果、火山灰であることが明らかとなった。その詳細に
ついては現在継続して分析中である。
- 註23) 畦畔に関する用語についての充分な検討を行なっていないので、今後はとりあえず、区画の基軸とな
る太い畦畔を大畦、それに較べて細く大畦間にみられる畦畔を小畦とした。用語の整理、検討は本報告
で行ないたい。
- 註24) 八賀 春 1968 「古代における水田開発—その土壤的環境—」『日本史研究』96 p. p. 1~24
八賀 春 1971 「古代の農耕と土壤」『古代の日本』2 p. p. 23~40

参考文献

- 藤原信彦他、1982、3 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書」仙台市文化財調査報告書第40集
- 田中則和他、1981、12 「六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書第34集
- 丹羽 茂 1981、11 「大木式上器」『縄文文化の研究』第4巻 雄山閣
- 丹羽・阿部・小野寺 1982、3 「苦生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』宮城県文化財調査報告書 第92集
- 芳賀良光 1968、12 「宮城県宮古島貝塚梨木畠遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会編
- 中村・三塚・阿部・佐藤 1975、4 「沼津貝塚の考古学的調査」『沼津貝塚保存管理策定事業報告書』石巻市教育委員会
- 渡部弘美・主浜光朗他 1981、3 「山山上ノ台遺跡」仙台市文化財調査報告書第30集
- 後藤勝彦他 1975、4 「中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史』川崎町史編纂委員会

職 員 錄

社会教育課

課長 水野昌一
主幹 早坂春一

文化財管理係

係長(新) 大沢隆夫
係主 事 山口宏
* 渡辺洋

文化財調査係

係長(新)	早坂春一	隆彦
教諭	佐渡辺藤忠	若範和一
*	佐加藤正則	茂義
主事	田中城則	民一
*	結城一誠	正道
*	浜崎成也	一郎
教主	青木論事	洋次
*	柳澤木村	平司
*	佐藤原泰一	美鶴
*	金森安甲	彦一
*	佐藤恭吉	格也
*	岡田弘光	寅
*	藤井勝	也
*	浜田勝也	寅
*	大庭主	一
*	高島長也	一
*	高橋勝也	一
派遣職員	鈴木勝也	
嘱託	鈴木寅	

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物霧川下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙台城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕沢寺跡古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法螺塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒谷木本松室跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市高沢裏町吉塙発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市山向山堂宮山柄穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町奈寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市山町安久東道路発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小泉遺跡一範開墾跡調査報告書（昭和53年3月）
第14集 壴跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集 北壁遺跡（昭和54年3月）
第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集 仙台市開発関係道路調査報告書1（昭和55年3月）
第22集 経ヶ原（昭和55年3月）
第23集 年報1（昭和55年3月）
第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集 三神軍遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集 年報2（昭和56年3月）
第29集 郡山遺跡Ⅰ—昭和55年度発掘調査概報一（昭和56年3月）
第30集 山手上・下台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集 仙台市開発関係道路調査報告書Ⅱ（昭和56年3月）
第32集 沼ノ堀遺跡発掘調査報告書Ⅱ（昭和56年3月）
第33集 山上・下台遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集 南小泉遺跡郡山市計画街路整備工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集 北前道跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）
第38集 郡山遺跡Ⅰ—昭和56年度発掘調査概報一（昭和57年3月）
第39集 無武道跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集 年報3（昭和57年3月）
第42集 郡山遺跡Ⅰ—七代造に伴う緊急発掘調査一（昭和57年3月）
第43集 架道跡（昭和57年8月）
第44集 沼ノ堀遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集 茂庭遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第46集 郡山遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第47集 仙台平野道跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
第49集 仙台市文化財分布調査報告書Ⅰ（昭和58年3月）
第50集 岩切堀中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集 仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
第53集 中田畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第54集 神明社遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集 南小泉遺跡一青葉女子学園移転新工事地内調査報告（昭和58年3月）
第56集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報Ⅱ（昭和58年3月）

- 第57集 年報4（昭和58年3月）
第58集 今泉城跡（昭和58年3月）
第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）
第60集 南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書一（昭和58年3月）

仙台市文化財調査報告書第56集

昭和57年度

仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ

昭和58年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 T E L 63-1166

